

---

# 灯台モト暗シ

如月睦月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灯台モト暗シ

### 【Nコード】

N2781J

### 【作者名】

如月睦月

### 【あらすじ】

今回の僕の仕事は、ある大金持ちのお嬢様を最悪の敵から守ることだった。いわゆるボディガードってやつだ。今迄にもこういう仕事を引き受けたことはあるが、僕が失敗したことはない。今回の場合も今迄となんら変わらない筈だった。変わらない、筈だったんだけれど……。

## 1 / 一期一会

「ねえ、ボディガードさん。……ねえったら。私、死ぬのかな？  
誰かが私を、殺しにくるんでしょ？」

「……そうならないようにするのが、僕の仕事だ。余計な心配はしなくていい。君は生き残る。最も、いつかは死ぬけどね。君の寿命迄君が生きていられるようにするのが、僕の仕事だ」

「……そっか。じゃあ何でいつか死ぬのに、皆必死になって生きてがるんだろっねえ？死ぬのは怖いからかな」

「それもあるだろうけど、皆色々あるだろう。一概に答えを出すことはできないさ。生きたい理由なんて、人それぞれだ。誰かの為に生きたい奴。自分の為に生きたい奴。仕事の為に生きたい奴。……そして、死にたくないから生きたい奴もいる。なにがなんでも生きたい奴がいる限り、僕の仕事はなくなるらない。……僕は、君の父親に君を守るように依頼された。勿論報酬は貰う。既に前金は受け取ったよ。だから仕事はこなす。何たって僕はプロだからね」

「……あなた、高校生位にしか見えないけど、それでぶる？とつも凄腕のボディガードには見えないけど」

「そう言う君だって女子高生じゃないか。あの有名なお嬢様学校で生徒会長をやっているんだろ？知ってるよ。天童財閥の総帥、天童清の一人娘、天童灯。容姿端麗、頭脳明晰、才色兼備の天童財閥の跡取り娘。君の結婚相手が、天童財閥次期当主になる。全く、お疲れ様だよ」

「……うるさい。私だつて好きでやってるんじゃない。私は、天童。生まれたときから天童なのよ。天童の名が私を縛るのよ。だから私は天童灯。行く行くは好きでもない男と結ばれ、好きでもない男の子供を産まなければ、ならないの。それが私の、宿命だから……」

彼女は、物憂げな表情で僕を真剣に見つめていた。

他に誰もいない高級ホテルのスイートルーム。

他の誰よりも綺麗なドレスを着て、他の誰よりも美しい顔で、他の誰よりも不幸な彼女は、ベッドに腰掛けて僕の方を見ていた。

整った、キラキラしたラインが縁取る輪郭。

美しい目鼻立ち。可愛らしい大きな目。

そして宝石のような輝きを放つ髪の毛。長い髪の毛。色は黒だが、それで充分彼女は美しい。

これ以上は野暮だ。他の全ての同年代女性を敵に回しかねない美貌と言えば想像できるだろうか。

……いや難しいだろうな。何せ僕は想像力に乏しいと、人に良く言われるからだ。

「ああそうかよ。僕には関係無いけどな。君と僕は、他人なんだからな。全くの無関係。赤の他人、だからな」

「そうよ。余計なことは言わずに訊かずに、ただ私を守ってくれればそれでいいの。……所で、そろそろあなたの名前、教えなさいよ。

なんて呼べばいいか、分からないんだから」

ん〜。まだよくわかってないなこいつ。僕がプロだっていうことの本質を理解していない。

「あのなあ、僕はプロだって言ったよな」

彼女は首を傾げて聞き返す。こいつ、頭良いんじゃないかったっけ。

「それが……？」

「だから、本当の名前、本名なんて教えるわけないだろ。公務員じゃないんだぞ。これは表沙汰にはできない仕事なんだよ。分かっているか？ だから僕が呼ばれたんだ。」

「……じゃあ、なんて呼べばいいの？」

……まあしかし、呼び名は必要か。いざというときにコードネームのような物は役に立つ。

それなら……そうだな……。

「キリコと呼んでくれ。それが一番分かりやすい。いつもの呼ばれ方だ」

「キ……リ……コ？ なにそれ？ 変なの……。キリコ？ そう呼べばいいの？ なんだか呼びにくいよ」

「嫌なら《お前》とか、《君》とかでも構わない。僕はどうでもいい。どうせ少しの間だ。君のボディーガードは。君の命を狙う奴を、

引き裂いて壊して崩してこの世にいたくすれば仕事は終わり。それ迄の関係なんだから」

「……そんなこと、君にできるの？ どうやるの？ その細い腕で、その、なんていうか普通の体格で、私と同じ位の人間の男の子が、……相手だってプロなのよ」

僕は笑う。なんて馬鹿馬鹿しい。なんて下らない。そんなこと、僕が失敗する理由にはならない。

「だからいったでしょ。僕はプロだって。まあ待ちなつて。その内見せてあげるよ」

## 2 / 紆余曲折

「どうだった？ 天童財閥の跡取り娘は？ どんな感じだった？ やっぱり我が儘な唯我独尊なのかな？」

「ん〜あれは唯我独尊というよりは、天涯孤独の不幸少女の箱入り娘の孤立無援の自縄自縛の自暴自棄の八方美人の波瀾万丈の不倶戴天の……」

「ストップ！ 私が間違ってたっ。君に向かって四文字熟語は、タブーだったっ。お〜い、お〜い戻ってきて〜」

そういつて彼女は、焦ったように僕の顔の前で手をブンブンと振る。そんなにしなくったって、ちゃんと分かっているのに。

「分かってますよ柳先輩。きちんと会って、話しをしてきました。これからすぐにでも戻って二十四時間、三百六十五日、四六時中、年中無休、張り付いて、守って、守って、張り付けば良いんでしょ？ それが僕の仕事なんでしたよねえ？」

「……そ、そうよ。それが君の仕事で、任務です。まあ今更君相手に確認も何もないけど。恐れ多くも悪名高き、君に説明なんて失礼でしたねえ。」

何処かの社長秘書のような格好で、眼鏡をかけ、ロングの黒髪を後ろで一纏めにし、とても裏世界を牛耳る秘密結社の社員とは思えない。

この僕のマネージャーであり、中間管理職であり、交渉調査等を担

当する人間だなんて誰が思うだろうか？

まあ、だからこそ彼女が、僕の相棒に選ばれたのだろうけど。

こう見えても柳さんは先輩だ。この世界に入ったのは彼女が先。

それを後から入った僕が追い抜いただけ。

最も、僕と彼女では得意とする分野が、担当する仕事が全く異なるのだから、どちらがより有能かなんて議論することもくだらない。

僕は現場の最前線。サラリーマンで言えば営業周り。球団で言えば野球選手だ。

彼女は中間管理職。サラリーマンで言えば事務職。球団で言えば交渉人だ。

はい、分かりにくい説明終わり。だから僕は想像力が無いんだつてば。

「それより、これからは暫くの間、直接会うことはできないから、はい。これ携帯。」

そういつて彼女は最新機種の携帯を僕に手渡す。

今は携帯でテレビが見れたりするんだっけ。

僕の知らないところで、日に日に科学は進歩しているんだなあ。

四文字熟語で表すと、《日進月歩》だろうか。



僕は彼女から携帯を受けとる。軽く互いの指が触れあう。

別に何も無い。ベタベタな展開を期待されても困る。

そして開く。アドレス帳を表示して確認。そこには柳先輩のアドレスと番号が既に登録されていた。

それ以外にはなにもない。寂しい限りだ。別に気にしないけれど。

「今回の仕事、長引きそうですか？ 柳先輩とずっと会えないなんて寂しいですね……」

「そんなこと言ったって、仕方ないでしょう。天童財閥の一人娘とイチャイチャしてれば良いんじゃないの？ ほら美人だって噂よ」

「……実際そうでしたけど、仕事に私情を挟むなって、いつも柳先輩が言ってるじゃないですか。それにあの娘は……」

名前に縛られたあの娘は……。宿命に縛られたあの少女は……。

「……ん？ 何？ あの娘がどうしたの？」

「……いえ、なんでもありません。……タイプじゃないんですよ。ほら、僕ってロリコンじゃないですか」

「自分で言うんだ……。潔いとも言えるけど、あまり女性相手には晒さない方が良くわよ。自分の性癖を」

「嫌だなあ。いつも僕に、人は殺しても嘘は吐くなって、説教する

のは先輩じゃないですかあ。先輩の教えを、貫き通しているだけですよ」

こう言うのなんて言ったっけ？ ああそつだ。《付和雷同》か。でもそれって確か悪い意味じゃなかったか？

自分の考えを持たず、むやみに他人の言動に賛同すること。

という意味だ。四文字熟語オタクの、豆知識のコーナーでした。パチパチパチ。

「そうだけど……あゝもう機転を効かせなさいよ。人間、一つの視点から物を見続けていたら、いつか足元をすくわれるのよ。臨機応変……あつ、ダメダメ今の無しっ」

「《臨機応変》、その場に望み、変化に応じて適切な処置をすること、と言う意味です。さすが先輩です。まさに《博覧強記》、ですね。改めて尊敬します」

「……博覧？ ……強記？ ん、あゝ、そつね、……そつなの？」

明らかにについていけない、という表情で話しを合わせる柳先輩。ふう。やれやれ。一体いつになったら僕と対等に四文字熟語トークで盛り上げられる相手に出逢えるのだろうか？

そもそも友好関係の狭い僕にとって、柳先輩は数少ない話し相手なのだけ。

彼女では、僕は満足できないのだ。

……いやいや変な意味じゃなくってね。

「それにしても……相手はあの《切断魔》、ですか。怖いすねえ。なんでも真つ二つにしちゃうんですよね。でもどうしてまたあの怖い人が、天童財閥の一人娘なんか狙うんですか？ 僕、何もきいてないんですけど。今回の経緯とか……」

「ああ、そうだった？ ごめんごめん。忘れてたよ」

ごめんでは済まされない。戦闘になってから、知らなかったでは遅いのだ。

敵の情報や、敵の目的。それを知っているのと知らないでは、大違いだ。

危ないところだった。本当にこの人大丈夫か？

他にもなにか、忘れてることはないだろうな？

「相手もねえ、依頼を受けているのよ。《切断魔》を雇った奴がいるのよ」

「……それって、誰なのか分からないんですか？ 天童財閥に恨みを持つ誰かとか？ 何にしても、物騒な話ですね」

「……君が言うてどうするのよ。明日にも《切断魔》が君の身体のパーツをバラしちゃうかもしれないのよ。もつと緊張感持ってよ。

……そんなんじゃ、微塵切りじゃ済まないかもよ」

……言ってくれる。そんなの喧嘩上等でバラし返してやるよ。

「だって、だから僕が呼ばれたんでしょ？ 相手が《切断魔》だから、僕が差し向けられたんじゃないんですか？」

彼女は凶星らしい。クイズの答えを当てられた出題者のような顔をして……。

「……ええ、まあそうよ。隠しても仕方ないけど、上は少なくとも例え《神隠し》が相手だとしても、自分達は《キリコ》を持ってから安心だと、そう思ってるみたい。」

《神隠し》……嫌な名前をきいた。二度と耳に入れたくない、その名前を。今度会ったら刻んでやる……。

「は〜そうですか。期待されてるんですね僕。やっとドキドキしてきたなあ。」

「そうね。君がいなければ、《切断魔》なんて相手にしようなんて馬鹿なこという連中じゃないわ、上は。君が確実に仕留められるという確信に基づいて、今回の天童財閥から依頼を受けたんだから……失敗したらただじゃ済まないわよ。……っていうか死ぬ、かな私達？」

まあそうだろう。それが当然で、それが常識。

何も今更驚く程のことじゃない。当たり前だ。失敗すれば待っているのは《死》だ。それしかない。

サラリーマンが仕事でミスをすれば上司に叱られるように、野球選手が成績を残せなければ二軍落ちするように、僕らの世界ではそれが当たり前。

役目を果たせない道具は、破棄されるのだ。

……というか《切断魔》に負けるということは、それすなわち《死》を意味する。

《切断魔》と闘って、痛み分け等有り得ない。どちらかが確実に、絶対にシヌ。

勿論死ぬのは《切断魔》の方になるんだけれどね。

僕が負ける？ ハア？ そんなことあるわけないじゃん。なにいつてんの。バカみたい。

あはは。僕が死ぬだって？ 上等だ。殺してみる。

阿鼻叫喚の急転直下に弱肉強食してやる。ああそうだとも。例え《切断魔》が四文字熟語オタクで、気が合いそうだとしてもだ。

そのときは、涙を流しながら止めを刺すことになるかな？

……無理か。涙なんて、とっくの昔に泣き方を忘れた。

「じゃあ行ってきますね。柳先輩」

「ええ。頑張つてね。頑張つて殺してきてね」

「は〜い了解です。ザクザクやっちゃいます」

「うん。いつてらっしゃい」

「行ってきます」

そして、僕達は他に誰もいない、古びた喫茶店を後にしたのだった。

ふうやれやれだ。またあの娘と会うことになるのか。そしてずっと離れられなくなるのだ。

そう思えば、一人でいられる今この時を、大切にしよう。

ゆっくり、ゆっくり、僕はあのホテルに戻ることにした。

### 3 / 一蓮托生

「というわけで、戻ってきました。本日から僕が君の命を守ることになります。危険が排除される迄は君の側からは絶対に離れません。いつ如何なることが起きようとも、例外はありません。それから僕は、取捨選択をしなければならぬ状況に直面した場合、迷いなく君の生命を最優先します。目の前で君の父親が人質にとられようが、君の母親が人質にとられようが、僕の仕事は君の安全の確保です。とはいえ心配はありません。君の両親にもボディーガードはついていませんし、彼等の実力は保証します。まずそういう状況に陥ることはないでしょう。これはあくまで最悪の状況が起こったら、という話です。……これでいいですか？ 天童灯さん。依頼内容の確認は、これでよろしいですね」

「……う、うん、まあ、はい」

本当にちゃんときいていたか？ こいつ、頭良いんだよな？

「あのな、こっちは命賭けてやってるんだけど、分かってるか？ このことを。僕が少しでも間違ったら君も僕も死ぬんだよ。生きるか死ぬか、その境目に僕達は立っているんだ。……少しは怖がる振りでもしてみたら？」

あんまり実感がわかない、という感じで可愛らしく首を傾げる彼女。

「なんだか展開が速すぎて、そういう気分じゃないんだよね。怖がれって言ったって、目の前にない物に対して怯えるなんて無理だよ」

なんとというか、嫌に落ち着いているな。まあ別段珍しいことでもな

いが。

たまにこういう人間がいる。脅威が眼前に迫る迄、自分の置かれている状況を把握できないのだ。

実際にその脅威と遭遇しなければ、肌身で感じなければ何が起きているのか理解できない。

そして理解したとたん狂いだす。暴れだす。

まるで麻酔が切れたみたいに。冷静ではいられなくなる。

そんな人間を、僕は腐る程見てきた。要するに平和ボケしてんだよ。

生きるか死ぬか、なんて漫画や小説の中だけで、現実には存在しない、そう勘違いしてるんだ。

全く。本当に呆れるしかない。生きるか死ぬかなんて、その辺に転がっているというのに。

お前達は、ただそれに気付いていないだけで、それはすぐそこにあるんだ。

彼女もそのタイプの人間だな。これで《切断魔》と相対したらどうなることやら。

その場で暴れられるのが一番困るんだが。

敵だって馬鹿じゃないんだし、ヒーローの変身シーンという絶好の攻撃機会を親切に手を出さずに待ってくれる悪役みたいに、愚かで



はないのだろうか。

彼女が狂いだしたときを狙われる恐れもある。まあそのときはそのときだが……。

「……もういいよ。いざとなったら君は僕の言うことをきいてくれればいい。精々、心の準備だけはしておいて、いつかは《死》がすぐそこ迄やってくるということを、納得しておいて」

彼女は僕を真っ直ぐに見つめて、真剣さを声に滲ませて言った。

「……わ、分かりました。よろしく、お願いします」

取り敢えずはこんなところだろうか。保護対象とはそれなりの信頼関係をきずかないといけない。

その点においては、まあ問題ないか。年も近いしな。

共通の話題も、少なくともはないだろうし。

……そうだ。まず一番最初にきいておかなければならないことを忘れていた。

ここ迄は仕事の話し。ここからは、私情の話しだ。

「一つきいていいか？」

「は、はいなんでしょう？」

なんで敬語なのだろうか？ さっき話したときはくだけた口調だっ

たのに。いや知らないけどさ。

「君の好きな四文字熟語を教えてくださいな」

「は？ 四文字？ 熟語？ なんで、なんでですか」

これは、僕が初めて会った人に必ずする質問だ。これでその人の人間性がわかる。

多分やっているのは僕だけだ。

「そう四文字熟語。なんでもいいよ。思い付いたのを一つ」

彼女は戸惑いながら、僕の質問に従う。

「……じゃあ、相思相愛、かな」

「ふ〜ん。《相思相愛》ね。中々可愛いところあるね。僕からみたら君は《晴耕雨読》って感じかな」

「なんですか、それは？ どういう意味、ですか」

お、食い付いてきた。少し見所があるぞこの娘。

僕は得意げに人差し指を立てて説明をする。

「《晴耕雨読》というのは、のんびり気ままに過ごすこと、という意味だ。今の君ののんびりした感じにぴったりだ。最も、早く目を覚ましてほしいところだけどね」

少し皮肉った。

ちなみに柳先輩にこの質問をしたときの答えは、《一石二鳥》だ。素人にありがちな答えだ。

あの人には全く才能がない。確かに《一石二鳥》という言葉は素晴らしいよ？

一つの石で二羽の鳥を仕留める、なんてそうそうできることじゃない。最初に言った人を尊敬する。

それに、一、ときて石、で二、の次に鳥だぞ。それでイツセキニチヨウなんだぜ。素晴らしい並びだと思わないか？

それから……。

「あの〜戻ってきて〜」

「ん、ああ。悪い悪い。自分の世界に入ってしまったようだ。それにしても君は見所があるよ。僕の先輩より才能がある」

「……なんの才能よ。それじゃあ私からも一つ質問していい？」

敬語が消えた。ある程度打ち解けたということだろうか。

「うん。別にいいよ。一つじゃなくてもいい。答えられる範囲で、質問に応じよう」

そして彼女はその綺麗な顔を朱に染めて、意外な質問をしてきたのだ。

「……彼女、とかいる？」

「は？ 彼女？ 彼女って、つまり、恋人とか、そういう？」

恥ずかしいそうに俯く彼女。そんなキャラだとは思わなかったけれど、やっぱり女の子だしな。

色恋沙汰に興味があるのは当然か。彼女はそれを許されない立場にいるのだし。

禁じられれば、それを破りたくなるのが人間だ。

「仕事柄、そういうのは未練になってしまっからな。いざというときに誰かの顔が思い浮かぶようじゃ、それは邪魔になる。死ぬ覚悟が簡単にできなくなるからな、それは戦闘において致命的だ。だから僕にはそういう人はいない。決してできないという訳じゃないよ」

僕と同僚達もそうだが、皆恋人を作りたがらない。

いたとしても、別れてからこの世界に入るのが普通だ。

「そう……なんだ。私と、同じなんだ。」

「ああ、まあそうだね」

違う意味で孤独だ。違う意味で、でも僕達は似た者同士なのかもしれない。

違う意味で似た者、か……。

「でも、憧れたり、しない？」

「……憧れ、ね。別にないな。そういうのは。もう忘れたよそんな感覚は」

遠い昔に置いてきた。僕のことを想ってくれた彼女と一緒に。

「……そっか。そうなんだ」

「うんそうだ」

《死》が己のすぐ側に迫ったとき、命を落とすことを恐れていたなら、この仕事は務まらない。

だから仕方なかった。彼女は泣いていたけれど……。

「……ところで、その格好で大丈夫？ ジーンズにパーカーで、私のことを守れるの？ もっと武装とか、しなくて」

ああ、このことが。ん？ 彼女はもしかしてきていないのだろうか。だとしたら、柳先輩、またやってくれたな。

「僕、君の彼氏の振りすることになってるんだけど」

「え？」

彼女は一瞬で、顔を上げ、もう一瞬でその顔を真っ赤にして動揺しだした。

「えっ？ 彼氏？ 君が？ 私の？ 彼氏？ えええっっっ？ か、かかか彼氏？」

なにをそんなに狼狽しているのだろう。僕なんか変なこといったか？ いやいつてない。

「なんだ嫌なのか？ 僕は、好みじゃないか？ だとしたら少し落ち込むけど……」

「いやっ。いやっ。そうじゃなくてっつ。えと、えと……じゃあお願いします」

そういつて彼女は頭を下げてくる。

「ああ。よろしく。アカリって、呼び捨てにすればいいかな」

「ええっつ？ アカリ、ですか？ 呼び捨て、呼び捨て……名前を呼び捨て……」

「嫌なら天童さん、でもいいけど」

彼女は熱い眼差しで期待を込めて言った。

「い、いやっ。アカリでいいっ。夢だった……あ、いや何でもないっ。アカリ……。アカリかあ……」

そんな彼女は、何処にでもいる普通の女の子に見えた。

少し見とれてしまったことは、この際伏せさせて貰おう。

前の彼女に失礼だからな。

勘違いしないでくれよ。僕はもう誰も愛さないさ。

そんなことを思いながら、天童灯、もとい天童アカリとの、仮恋人  
生活がスタートすることになる。

まあ精々楽しませて貰うとしよう。

#### 4 / 暗中模索

「あの、その……ええと、えと……」

「なんだいアカリ？」

「は、はいっ。どういたしましてっ。アカリでしたあっ」

「……は？」

彼女の様子がおかしいのは誰が見ても明らか。なんだいよいよ怖くなったのだろうか。

だとしたら、今更……という感じだけれど。

目が覚めないのなら、覚めない内に全て終わらせてしまうのも悪くない、そう思ってもいた。

「さっきからなにをもじもじしているんだ。僕も気になってしょうがないんだけど、言いたいことがあるならはつきり言ったらどうだい」

すると彼女は上目遣いで僕を見上げると。

「着替えたいん、だけど……」

なんだ、そんなことか。その程度のことです、何を迷っているのだろうか。この少女は。



「……着替えればいいじゃないか」

そういえば彼女はさっき会ったときに着ていたドレスをまだ身につけていた。

このホテルでは、この国の名高い富豪達が、財政界の有力者達が、国家権力者が大勢集まるパーティーが行われていた。

そしてそのパーティーを開催している大元が、つまり天童財閥というわけだ。

彼女の父親であるところの天童清。テンドウキヨシ、と読む。が現在の天童財閥の当主である。

数えきれない程の有力企業を傘下に持ち、数えきれない程の事業に手を出してはことごとく成功し、誰もが羨む富と名誉と名声を欲しのままにし、今もなおこの国に君臨し続けている天童財閥の頂点に座る人物だ。

彼の一人娘である天童アカリにも、このパーティーに出席する義務と責任があるわけだ。

何しろ天童財閥の跡取り娘。

彼女の心を射止めた者がいずれは天童財閥の全てを手に入れることができるのであれば、皆目の色を変えて我が息子を、いやいや我が息子を、となるのも無理はない。

天童財閥と繋がりを持つということは、天童財閥からの様々な計らいを受けるということに他ならないのだから。

その気になれば、自分達の好きなように世界を変えることだってできるかもしれない。

「…………だから、その…………ええと、えと…………」

「だからなんだよ」

「出て行ってよ。着替えられない、から」

まあその問題に突き当たるよなあ。それはそうだ。確かにそうなんだけれど…………。

「それはできない。二十四時間、年中無休、君を守るのが僕の仕事だ。だからそれはできない。僕が目を離した隙に君が殺されてしまったら僕はどんな顔をして先輩に報告すればいいんだ？ だって彼女が着替えるっていうからって、そしたら殺られていました。いやいや敵もやりますねえ。なんて、通用すると思うか？」

彼女は自分の胸を押さえるようにして続ける。

「…………じゃあどうすればいいの？」

「この場で着替えてくれればそれでいいじゃないか。全ては解決だ」

「この場で着替えろって…………」

彼女は胸を押さえる手をいつそう強くし、警戒心をむき出しにして言う。

「それってあなたの目の前で着替えるっていうこと？ そんなこと、できるわけないでしょ？ あなたの前で下着になれって？ そんなの恥ずかしくて死んじゃうっ／＼／＼」

「じゃあどうするんだ。言っておくけど、君の父親から君に対するある程度のあるれこれは認められているんだ。君の命を最優先にするように、くれぐれも頼むと言われている。そういうことなら僕も徹底的にやるさ。あらゆる穴を潰し、少しの芽も摘む。全ての可能性を考え、全ての危険性を排除する。勿論全ては君の為だ。……それは分かるだろ」

「でも……でも、そんなの……やっぱり恥ずかしい……よ」

「別に僕は何もしないさ。保護対象を襲ったりしないって。僕はこう見えて紳士なんだよ。信頼してくれていいよ」

「……本当？」

「ああ。大丈夫」

「それなら……」

彼女はその顔を赤く染めてながらも、渋々洋服ダンスの前に赴き引き出しを開けると、身に纏うドレスを脱ぎだした。

少しずつ、少しずつあらわになる彼女の女性らしい身体。

うん。やっぱりというかなんというか、……女、なんだな。

胸でかつ。ブラジャーに包まれたはち切れんばかりのそれが、僕の

視線を釘付けにする。

それだけじゃない。女性らしい体つき。キュツとしたウエスト。…  
…くびれが、凄い。

細い足。多分男ならまず目がいつてしまっただろう生足。程よい太さ。  
その全てが僕の目の前で恥ずかしがるように揃って並べてあるとく  
れば、それはもう見ないわけにはいかないだろう。

悲しい男の性ってやつだ。こればかりは逆らえない。

……ていうか僕は何をやっているんだ。全く、目を覚ますのは僕の方じゃないか。

それにしても本当に高校生かよ。女子高生かよ。何を食って何を飲んで育てばそんなのできるんだ？

殆んど芸術だな。……だから、僕は何をやっているんだ。

「……じろじろ見ないでよ。恥ずかしい、から……／＼／」

恥じらいは、彼女の魅力を引き立たせるスパイスにしかならない。

「……ああ、ごめんごめん。」

僕も気まずくなつて目を逸らす。

ここで気のきいたことが言えるのが僕のアイデンティティーだった筈なのに、何も浮かんでこない。

それぐらい、動揺していた。やっぱり、女性なんだよなあ……こいつ。

ようやく彼女は着替えを終えた。さっきよりはどこにでもいそうな普通の女子高生という感じだ。

所々に英語の文字がプリントされたTシャツに、可愛いミニスカート。

そんなにラフな格好になって大丈夫なのだろうかという位、なんと  
いうか普通の女の子になってしまった。

「……いいよ。堅苦しいのは嫌いだから」

ふうん。そういう物が。

「へえ。見違えたな。まるで別人だ。入れ替わったみたいだよ」

「……そうかな。そんなに変わる？ そんなに変わるのかな？ どう見える？ どう変わった？」

さっきの恥じらいから一転して、彼氏に自分の服装を誉めて貰ったがっている彼女のような表情で僕に問い掛ける。

まあ実際そうなのかもしれないな。実際そうなのかもしれない。だって彼女は、やっぱり人間で、女の子なんだから。

彼女のことを超人かなにかと誤解していた僕は、天童財閥の人間だからって何もかもが人とは違うわけではないというのに。

彼女がどういう人間なのか、少しだけ見えた気がした。

「ああ、いいんじゃないか。可愛くて」

「そ、そうかな。普通に見える？ 普通に可愛い？」

何かと普通にこだわるんだな。自分に無いものを求めてしまうのが、人間か。

一人っ子が兄弟を欲しがるとはみたくないもんか。

いや違うだろうけど。

だから僕は想像力がないんだってば。

「うん。普通で、今どきの女子高生って感じ」

「そっか〜。えへへ〜やった〜」

何をそんなに喜んでるんだろうか。そんなに嬉しいものなのか。

普通に憧れるとは、どういうことなんだろうか……。

僕にも少し分かるような気がしなくもない。

今の自分と違う未来が、もしかしたらあったのではないかと、そういう風に考えたことがないわけではない。

ないわけではない。

そんな物思いに耽りながら、両手をポケットの中に突っ込んでいると、ドンドンと部屋の扉を叩く音がする。

「お嬢様、失礼します。入ってもよろしいですか？」

それは、紛れもなく若い女性の声だった。

想像力に乏しい僕には、保証することはできないけれど。

## 5 / 運命邂逅

バキイイツ

この状況で、何をどうしたらそんな破壊音のような、破滅的な音が聞こえてくるのか分からない。

それはまるでドアをぶち破って何者かが侵入してきたような、まさかそんな荒唐無稽なことが現実にあるわけないじゃないか。

だがしかし、僕の目に映る現実には紛れもないそれだった。

おいおい気が早すぎるんじゃないのか。まだ始まったばかりじゃないか。

ここ迄早いとは僕も思わなかったぞ。これからこの可愛い保護対象と、いくつかのイベントとかがあつて親交を深めた後でバトルパートがくるんじゃないかと思っていたが……

いやいやっていうかさっきの声がお嬢様って。

ドアを突き破った《何者か》はその勢いを止めることなく、同時に殺気を解放しながらこの僕に向かってくる。

仕方なく力で押さえ込むことにする。相手が向かってくるのだから、これは正当防衛だ。許されて然るべきだ。

それが敵でなく、ましてや《切断魔》等では決してなく、恐らくこの可愛い保護対象の関係者であり味方なのだとしても……



突進してきた人影の動きを正確に見破り、驚くべき速さだが……僕もだてにこの仕事をやっていない。

こんなことは慣れっこだ。日常茶飯事、と言ってもいい。

この僕にかかればそんな速さは止まって見えるのと同義だ。

なめんじゃねえっての。侵入者の額を正確に狙って人差し指と中指を揃えて牽制した。

牽制だがそれはいつでも攻撃に移ることができる牽制だ。

そうでなければ、こいつ本気じゃないな、なんて見破られて次の瞬間には御陀仏だ。僕はそういう世界で生きている。

こいつは僕のいる世界とは程遠い。ランクが違う。格が違う。何から何まで僕の方が勝っている。

そいつは僕の牽制に動きを封じられ、その場に立ち尽くす。

よく見てみればやはり若い女性だった。確かに若い女性ではある。

だが、それは世間一般的な若い女性像とは程遠い。一目でわかる。戦う者の姿だった。

「……くっっ」

彼女は僕によって動くことを禁じられ、なす術なく立ち尽くす。

「あんた誰ですか」

「お前こそ、何者だ……」

そう言つて僕の問いに問いで返す彼女。まるで外国の富豪の家に仕えるメイドのような、格好をしていた。

エプロンドレスにホワイトブリム。まるっきり、というかそのまんま、それは確かに《メイド》らしき姿だった。

やべ初めて見たよメイド。実在したんだなメイド。現実に存在したんだなメイド。……いいな。

しかしその目はギラギラと好戦的な光を放っていた。……その歳で、綺麗な顔をしてそんな目をするか。

全く恐れ入る。背筋が凍る思いだ。……こいつがいつか自分に報復しにくる前に、ここで潰しておくべきか……

そんな気が起きてすぐに思い直す。とりあえず今は味方だろう。今は……

「桜さんドア壊しちゃダメだよ。入るなら普通に入ってきてよ」

可愛い保護対象は、そう言つて自然に会話に入ってきた。

「……申し訳ありません、お嬢様。得体の知れない気配を感じましたので、緊急自体かと……」

「得体の知れないって……」

何だ天童財閥は情報管理さえまともになっていないのか。対象の側  
近にくらい話を通しておけよ。

……ん？ まてよ。まさかまた柳先輩じゃないだろうな。

「止めてあげて、信頼の置ける私の、メイドさんだから」

「……メイドさん、ねえ」

やむなく牽制を解く。同時に殺気を収めた。すると彼女はショート  
カットの髪の毛を直して、こちらに向き直る。

行儀よくお辞儀。見るからに人としての器の大きさが窺える仕草だ。  
……少しタイプかもしれない。

「……桜守と、申します。あなたが例の人でしたか。ご無礼をお許  
しください。これが私の性分ですので……」

サクラマモリ。漢字二文字でサクラマモリ。可愛いと言うよりは格  
好良いが似合う大人の女性だった。

「ああ、こちらこそすいませんでした。何も考えずに威嚇しちゃっ  
て……」

とりあえず謝罪。

「ええ。それ位でないと仕事をお願いした意味がないでしょうから、  
結構ですよ。合格、と言ったところですよ」

えー、なんか生意気。けどそこが良い。ツンツンしたところが少し好

みだ。まあ僕はロリコンだけれど。

「それはどうも……」

「あー完全に壊れてるよ。風通しよくなっちゃったよ。どうするのー」

何かこういうことが当たり前みたいな接し方。この人はこれがいつものスタンスなのか。

とんだ暴力メイドもいたものだ。いやいや全く恐れ入るよ。

「……後で手配しますので」

「早くしてね」

「かしこまりました……」まあどうでもいいが……。いやどうでもいいか、これから一緒に仕事をする人間ということにもなるのか。

この綺麗な歩く暴力メイドさんとは、やはりそれなりの信頼関係を、か……

しかし僕としても、綺麗な人とお近づきになるということについては、まんざらでもなかったりするけれど……

やはりと言っか、僕としては、あの質問をまずしなければならぬだろう。

「あのーっ聞いて良いですか……桜さん、桜守、さん」

「……なんでしょっか」

「……またやるのあれ」

やるとも。やるさ。やらなくてどうするんだ。やらなければ、僕が  
廃ると言うもの。

四文字熟語オタクの名にかけて、ここはどうしても譲れないっ。

「あの……なんでしょっか」

「年下でも大丈夫ですかっっ？」

聞けなかった。やっぱり聞けなかった。オタクだと思われなくな  
った。気持ち悪い奴だと思われなくなかった。

「……はあ、ええと……」

「あつ私のときと違うっ。何で？ これ差別かな？ 差別じゃない  
のかな？ どうしてこんなに扱いが違うのっ？」

「何のことだいアカリ。全然分からないなあ。何のことだいそれは」  
何と言われようが、誰に言われようが、僕は四文字熟語よりは綺麗  
なメイドさんが好きなのであつた。

これが現実だ。……どんなに格好良く言ったところで、格好良くは  
ならなかった。……現実は厳しい。

「……う、う。何よもお。桜さんの方が、良いっていうの？」  
「ド。私の彼氏じゃなかったのー」

「それはだから振りだよ振り」

「……何のことでしょうか？ 彼氏、とは」

「いやいや気にしないでいいですよ。こっちの話なんで……」

「こっちの話！ そうねこっちの話だわ！ 私と桜さんとで女性としての扱いが違うのだって、こっちの話だから！」

やれやれ。何かすねてるよ。こいつやっぱり頭悪いな。行動が感情的というか何というか……勉強とか成績とかは置いといて、人間としてまだ子供だ。

「まあまあ落ち着けて。……ほら好きだからさ」

「何それ軽つつ。軽いよ、軽すぎるよ。そんなに何も感じない言葉って逆に凄いつ」

キャラが軽くなってる気がする。彼女、こんなに突っ走る性格だったのか。だとしたらようやく僕に気を許してくれたということかな。ふふふ。それが僕の狙いだったのさ。……言ってる虚しいな。ごめんなさい嘘でした。

「それにしても、ここまで若い方だとは……業界最高峰の方が来ると聞いていましたが、あなたがそうなんですか？」

「ええ。業界最高峰です」

そういうものに、業界があるのかも思うけど……他に何とさえいえばいいか思いつかないので仕方なく善処。

いやあ気持ち良いもんだねえ。綺麗な人に最高峰なんて言われちゃったよ。褒められてしまったよ。

……まあ悪くはないよな。悪くはない。

「うっ……無視された……」

打たれ弱っ。天童財閥の一人娘打たれ弱っ。……こんな僕なんかは無視されたぐらいで落ち込むことはないさ。

こんな僕なんかに、ね……。

そんな自嘲で、格好付けて斜に構える僕。相変わらず格好悪。

「お嬢様、お気を確かに。お嬢様は充分魅力的ですよ」

「ぐすん……そうかなあ」

「はいそうです」

なんかどっちもバカっぽいなあ。低レベルな話し合いというか、この人もひょっとして天然かなあ。

「お嬢様をいじめるのなら、今すぐ決着をつけても……」

「はは、面白いっすねえ。やりますか。格の違いを見せて……」

「だめに決まってるでしょっ。何で私がこんな真面目なこと言わなきゃならないのっ」

面白い感じに、キャラが乱れてきた。天童アカリはノリのいい奴だった。



## 6 / 状況整理

.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....

天童財閥は曲がりなりにもどこを取っても、正真正銘の《支配者》であった。

その支配の及ぶところはこの世界の何から何までである。そう、全てと言ってもいい。

この世有るべくしてある、生きるべくして生きるもの達に容赦なく影響を与えるのがそれという彼等だ。

その名を知らぬ者はそれだけで問答無用に世間知らずの烙印を押されることを免れない、言わば世界のステータスである。

世界基準、全国基準、地球基準、宇宙基準。

それはどこかの国で起きた独裁政治等では決してなく、民を虐げ苦しめ搾取し利用しようというものでもなく、ただ基準としてそこにあるものだ。

それだけでこの世界にどれ程の影響を与えるか、人並みに学業を学んで来た人間ならば分かることだろう。

天童財閥の歴史は江戸時代迄に遡る。まだ幕府がこの国を支配していた頃……、一人の人間がいた。

一人の人間として生まれるべくして生まれた男が歴史にいた。

その男は他の人間とは異なる考え方を持っていた。持っていたというか、それはそもそも言い方がおかしいかもしれない。

在るべくしてあつたとしか、言えないのかもしれないが、僕のような凡人の想像力欠如には、恐れ多くも差し出がましくも、ここはそう言わせて貰うとしよう……

兎にも角にもその男、

天童の祖先にあたるその人間こそが、今日の天童財閥の栄光を作ったのだ。

当時、鎖国の状態にあつたこの国において初めて国際的な考えを広めた人物として有名だ。教科書に載っているかどうかは、どうぞご自由に確認してくれ。学校の教科書で僕が未だに忘れない知識は現代文の最後のページにある四文字熟語のコーナーだけだ。

まあいい……そんなどうにでも書き換えられる、ペラペラな歴史なんかには、いまは用はない。

これはただの前置きである。ほんの序章でしかない、前座とでも言うべき、物語の最初の最初である。

この場合出てきて貰うべきは、今現在目の前に存在する事実である。最悪の敵が、一人の女の子を抹殺しようとしているという事実

であろう。

それを最初に察知したのは他ならぬ天童財閥自身だ。

誰でも理解していることとは思いますが……とにかく強大にして凶大にして巨大の組織の中の組織であり、支配者の中の支配者である天童財閥。

これが全くの健全、正ありきの真正銘の正義だということは諦めて頂きたい。

大きければ大きい程、強力であれば強力である程、それは善悪、白黒、明暗、を使い分けているものだ。

線を引いた内と外を、上手く渡り歩いているものだ。それはいつの時代も変わらない。

天童財閥は、悪を飼い慣らす連中だ。あらゆる裏組織と繋がりを持つ、支配者としての悪。

合法、非合法に関わらず利用できるものを利用し、無価値なものを切り捨てて存続してきた。

そして今その闇が自身に牙を剥いたわけだ。自業自得とも言えるか。

一体どこのどいつが彼女の死を望んでいるのか、それは分からないが……想像できないし、想像したくもない。

そこにどんな血生臭い理由があるのか、別に知りたくもないし、そもそも想像力が著しく欠如した僕にしてみれば今更どうしようもないことだけだ。

そんな理由なんかは置いておくとして、その情報を裏の伝手から得た天童は、《僕達》に依頼をよこしたわけだ。

そういうことになる。後から先輩に聞いた話によれば、そういうことになっていくらしい。

まあ、……この僕にしてみれば、そんなどうでもいい事情なんていうものは、ここに至る迄の理由なんていう小さすぎてくだらないことに興味はない。

僕はプロだ。プロフェッショナルだ。仕事に私情を、挟んだりはない。挟むことは、許されない。

言われるがまま、されるがままに、ただそうであるようにそうするだけだ。例え彼女の抹殺を《切断魔》に依頼した理由が、あって無いが如しの、屁理屈にまみれた幼稚なものであったとしても……

僕は別にどうでもいい。その何者かに対して、お前はそれでも人間か？　なんて理不尽な疑問を投げかけたりはしない。

僕はプロだ。僕はプロフェッショナルだ。

誰かに利用され、誰かを利用する者。ただそこに有るべくして有る、いるべくしている、中間管理職。

世界の釣り合いをとる者。世界のバランスを見守るもの。その為に僕は日夜人知れず働いているのだ。

僕が今死んでも、世界は死んだりしないだろう。僕だけを置き去りにして、その先に進むだろう。

だからって僕は、自分の人生を無駄とは思わない。世界の役に立つ立とうなんて、言っただってきりがないからな。

自分が世界に見放されたとしても、それは仕方のないことだ。それを世界のせいにするのは間違いだ。

世界はいつだって、誰にだって平等。天は人の上に人を作らず。人の下にも、人を作らず。

そこには頭の良い人間と、それ以外がいるだけだ。そしてこの僕がそのどちらかに属するのかといえば、言う迄もなく後者の方だろうな。

僕に物を考えるだけの頭があつたのなら……今こんなところに立つてはいないだろうから。

ふうやれやれ。また思考の無駄使いか。全く呆れ果てる。自分の駄目さ加減にもはや感服の至りだ。

溜め息の限りだ。きっとこんな自分のことを、世界はもう諦めているのだろう。

僕に期待なんかしていない筈だ。負けると分かっている馬の馬券を誰が買うだろうか？

僕が世界だったら、間違つてもこんな想像力欠如の凡人を主役にしたりしない。物語の中心に持つてきたりはしないだろう。

そんなワインの樽に泥を混ぜるような、愚行に走る筈はない。まあ

……それにしたって、この僕が間違いを犯さなかったこと等、数える程にしかないのだから保証はできないか。

むしろ僕がルールであるからにして、それ以外にそんなことは有り得ないような気もする。いやはや、この僕はどこ迄自分を貶めれば気が済むのだろうな。

……自虐趣味もいいところだ。僕は自らを痛めつけることに悦楽を感じるような変態ではないというのに。

……《切断魔》の話をしようか。彼は、いや彼女かもしれないが、《切断魔》という存在は《僕達》の間では有名だ。

日の当たらない《裏》で生きる者達の中でも異端も異端。カリスマもカリスマ。標的を確実に抹殺する……いわば殺し屋である。

僕も実際に会ったことはないが、その伝説じみた噂は聞こえている。……狙われた者の五体を必ず不満足にして殺すことからその名前がついた。首と、右手と、左手と、右足と、左足を……である。

本当に悪趣味な奴だと思う。他人の殺し方をとやかく言うつもりはないが、人間の人体における特に重要な四肢を奪い去った後に首を斬る殺し方に僕は賛同できない。

楽に殺ってあげればいいじゃないか。どうしてそこ迄に残酷な方法を選択するか……殺し方にこだわりがあるのはプロの証という奴もいるが、それでも大抵はなるべく苦しまないやり方がセオリーってもんだらうが。

だって、だって……死ぬんだぜ。死ぬってことは最後ってことだ。



僕を精々楽しませてくれ。斬離虎を精々楽しませてくれ……



## 7 / 玉石混淆

生きていくということは、何かを求めるといふ行為なのか。それをしないといふことは、つまりは居ても居なくても同じ……そういうことになってしまふのだろうか。

人間はいつでも、それでも生きていく。仕方なくも、意味もなくも、そんなことは関係なしに……生きる人々。

僕は生きていて、彼女も生きていて、彼女も生きていて、……やはり彼女も生きていた。死んではない。人間として、生命活動を絶やすことなく、あらゆる意味で《そう》している。

この世に生きとし生ける者全て、全ては余りにも不幸で、余りにも運がなく、余りにも最悪で、余りにも最低。

生きている時点で、それは既にマイナスなのだ……

「私さあ……許嫁がいるんだって……」

「……へえ。それが、なんだよ。自慢かよ……」

そんなんじゃないことは、分かっていた。彼女の顔を見ていれば、そんなことは明らかだ。

「……別に、違うよ。……ただ、どうしてこんなかなあーって。私何で、どうしてかなあ」

「……」それは何か……彼女が、僕に理解を求めて欲しがって

いるかのような。そんな風に聞こえた。

僕に何ができるといふのだ。僕が何を換えられるといふのか。こんな僕なんか、どうしろといふのか……

「私、生徒会長です」

「知ってる」

「私、成績学校で一番です」

「それが……」

「私、結構可愛いです」

「……まあ」

「いい身体、してると思います」

「……まあ」

「女の子、です」

「当たり前だ」

こんな可愛い男の子は居ないだろう。世界には、まだ僕の知らないことが数あれど、こんな可愛い男の子は多分いない……と思う。

「……人間、です」

「当たり前だ……」

こうして僕に話しかけている君。言葉が、一つ一つ儚げで。一つ一つ臆気で……何故かそれは危険な魅力というか、危なげな魅力がした。可愛い女の子、だ。天童アカリ……

「……人間って、どうしてこんな……」

彼女は、言う。

「辛い、かな……」

「……辛い？」

「辛い、ていうか苦しい、ていうか……」

「君がどんな風に思っているか、知ったことではないけれど……君と僕は何にしたって、全然無関係の……赤の他人だけ……」

お前は、何を苦しむ？ 何を辛い……

「僕で良かったら……話をきくよ」

彼女は……そして、何かを躊躇うように、何かを迷うように、それでも僕に正面を向けていた。

綺麗な瞳。その二つに僕の姿が映る。本当に綺麗な目。

「私は……」

私は……

「私は……」

……

「……うっっ、いやっっ。違う……駄目ダメっっ。違うの、違うのっ……やっぱり駄目」

「……は」

だからそれは、どういう意味？

「今のは無しで……」

「無しって……」

別にいいけどさあ。僕は別にいいけどさあ。何か、何かあるような気がして……こっちもそれなりに身構えていたけど、まあ……

「ああ……」

「すみません」

別に謝らなくたって……いいのに。そんな必要はないというのに。彼女は、彼女は……

一体何を迷う。

「あはは、はは。気にしないで、ね。面白くなかったよね？ ごめんごめん……」

「ああ、滅茶苦茶すべったよ今の」

全然面白くも、可笑しくもない……可愛い女の子が、その顔を歪めている絵なんて、全くつまらない。

全然、面白くない。

「……面白い話をしよう」

「……へ？」

何を思ったか、そんなことを言っていた。そんな自分でハードルを上げてどうする。僕は。

「昔、さあ。挫折したんだよ。僕。スランプっていうか、洒落にならない程の……地獄」

「……」

どうしたのかなあ僕は。

「十四、十五つてところか……まだ中学生位。あらゆる意味で未熟だった……」

そんな僕の時代。洒落にもならない、昔話。

「ある日、ふと思ったんだよ。馬鹿馬鹿しい程に、瞭然な問題。どうにもならない、人間に知能があっただばかりに行き着いてしまった……人が一生越えられない壁」

馬鹿馬鹿しい、話だ……

「人間って、いつか死ぬだろ」

《死ぬ》それは何も無いということ。全てがないということ。存在がないということ。果てしない、《無》ということ。

「人間は、いつか死ぬ。男より、女の方が長く生きるというけれど、それでもそんなのは、些細な違いだ。僕は、いつか死ぬのなら、今生きている意味が分からなくなって……いつか死んでしまうのなら、生きている内に何をしようが、何を成し遂げようが無駄な気がして……」

そんな時が、僕にもあったなと……感慨に耽りながら、

「……………」

「何もする気が起きなくなって、何もしたくなくなって、全てを諦めて、全てに絶望した。馬鹿な餓鬼だと……君も思うだろう？ そんなことで、潰れてしまうなんて……なんて弱い人間だ」

思い出して恥ずかしくなる、僕の暗黒時代。何もかもを知らなくて、何もかもを知らなかった頃の話。……自分の力を、まだ知らなかった、頃の話。

「……………」

「……………まあでも、今は大丈夫になった。思考が柔軟になったって言うか……考え方が大人になったって言うか、もうそんなことで潰れたりしない。成長、したのかもな」

「……私も、いつか……」

「？」

彼女は、言う。

「私も、いつかそんな風に……なれるかな」

「……」

「今が遠い過去になるくらい、時間が経ったら……そんな風に笑いながら、昔話にできるかな……」

「君次第だ」

天童アカリなら、多分やるだろう。彼女は、僕なんかとは違うのだから。僕とは違う世界で……僕とは違うことができるはずだ。

「……ありがとう、私……頑張れるような気がする」

「それはどういたしまして」

感謝されるような、ことではないさ。彼女は、天童アカリは……

「よし、《粉骨碎身》頑張るよ」

「……はは、《孤軍奮闘》頑張ってくれ」

「独りじゃないよ……」

「？」

彼女は、言う。

「君が、いる」



## 8 / 妖艶従者

君が、いる……か。

本当、何考えてるんだろっな。彼女は。……勘違いしてないだろうな。誤解するなよ。間違えるなよ。

君と僕は、違う。

スウー、スウー

可愛らしい寝息をたてて、豪華な装飾が施されたベッドで眠りに落ちていたのは、彼女。

天童アカリだった。その寝顔は、お姫様みたいで暫く見つめていた衝動に駆られる。……こんなに可愛い女の子が、一体どんな大きなものを抱えているのだろうな。

彼女は、普通に憧れていた。悲しい程にそれは可哀想で……本当に不幸。彼女はいずれ、今認められている少しの自由さえ許されなくなるだろう。

彼女は、天童なのだから。……知りたくないことだって、いつかは知らなきゃいけない。

そして、僕は思い出す。彼女と最初に会ったときのことを。彼女は、僕が《裏》の人間だということを知った上でも、さして取り乱す事もなく、対応を変えることもなかった。

あれはつまり、知っていたのだ。《裏》の何たるかを。《僕達》の存在を。彼女は知っていたのだ。

この世界は、綺麗な物ばかりではないということ……彼女は知っていたのだ。天童の後継者として。

後継者として、それを知らされた。

やがてはそれらを統べることになる、未来。……将来の為。

支配者、になる為。天童アカリ。彼女は……紛れもない天童だ。

深夜、相も変わらずホテルの一室。只今任務、続行中。

当たり前だが、僕は休むことなど許されない。不眠不休で働いているわけだ。褒めて欲しいよ、全く……

まあ長い間眠らない訓練は、僕達はこの世界に入るときに、まず最初にすることだ。基本中の基本。

これが出来なければ、お話しにもならない。僕なら余裕で、半年はいける。これが凄い方なのかと言えば、そうでもないのだ。

僕の同僚には、もう何年も寝ることを忘れてしまった奴もいる。だから、それは怖いのだ。

報復が、怖いのだ……

「キリコ、さん」

「あなたはその名で呼ぶんですね」

桜守。サクラマモリ……

この部屋で、僕達はもう長い時間二人っきりでいた。正確には、もう一人寝ているが……

「ええ、それが自然でしょうから」

「その名は、皆怖がるんですけどね」

「……それが気になるんですけど」

「何が、ですか」

「あなた、確かに相対して分かりました。悔しいですけど……あなたと私では、《世界》が違うようです。階段の上から、見下ろされているような気さえする。でも……」

彼女は、言う。

「《裏》の最高峰。っていうのは……そんなに簡単、というか。いや、言い方が悪いのかもしれないけど……単純に、純粹に……ただあなたは強いということだけなんですか？」

「……そうですね」

僕は、自分のことを自画自賛するつもりはないけど、この世界ではそうだ……僕は、

「まあ、複雑な問題や……難しい問題が絡んだり、絡まったりして

いるわけですけど。そうですね、まあ取りあえず僕は滅茶苦茶強いですよ」

それはただ単純に、戦闘においての純粋な《強さ》だ。僕に一对一で勝つことは……非常に難しい、ということだ。

それにも、一言では語れない事情があるのだけだ。

「強いだけで、全て解決するんですか？ ……あの、《裏》というものは、そちらの《世界》というものは」

「強いだけなら、獣とかも強いですからね。でもそうですね、ただ《強い》だけでは駄目ですよ。他にも色々な事が重要なんです。僕は釣り合いをとる者……ですから」

「釣り合い、ですか？」

彼女は、そう聞いた。

「そうです。釣り合い。僕達程依怙鬲肩のない、世界に平等な仕事はないですよ。釣り合いをとる……バランスを保つ。それはつまり、そういうことなんです。僕は依頼を受ければ、依頼主が幼稚園児だとしても……米国の大統領を暗殺しますよ」

「……はあ、そうなんですか？ よくわかりませんね。いや、わかるうとしてすぐにそれができる程、簡単な話ではないのでしょうか……でしたら」

そう言って、彼女は僕の方によってきた。

「私の依頼とか、お受けしていただけるのでしょうか」

「……依頼、ですか。でも今は……」

「いえ、聞いてみただけです」

「……はあ」

何なんだよ一体。今日はさつきから、アカリもマモリさんも、変な態度ばかりとって。

「とは言っても、お金とかたくさん必要ですからね。人ひとり抹殺するのには、人間の命に釣り合うだけの金。人ひとり守るのにも、人間の命に釣り合うだけの金。一番わかりやすい形が、金ですからね。無一文では依頼も何もありませんから」

今回の依頼にも、国家予算が傾くような金額が動いている。天童財閥総帥である天童清の個人資産は、一つの小さな国なら買収できるようなものであるらしい。噂を鵜呑みにしても仕方がないが、あながち間違いでもないだろう。

「お金なら、ありますよ。これでも、天童財閥に仕えている身ですから……あまり使ったことはありませんけど」

「……へえ。まあ、そうなんでしょうね。なにせ天下の天童だ。出し惜しみはしないんでしょう。マモリさんは、彼女の付きメイド兼護衛ってところですか。それはそれは、かなりの貯金があるのでは？」

いやらしい話だが、それも仕方ないことだろう。少し間違えば、何もかも終わってしまう。そんなギリギリのやり取りをする仕事だ。

それと引き換えに、お金に色がつくのは当然というものだ。

「……お恥ずかしい話ですが、それなりに」

「ふふふ、顔が笑ってますよマモリさん」

「……やめてください」

いやらしい話だった。生々しい話だった。

大人の、話である。

……いやだってお金がないと生きていけないし。

ないよりはあった方がいいのさ。お金は、人の心を駄目にするというけれど……お金がなければないで、それでも人は駄目になる。

「じゃあ、いずれ今の仕事を引退とかになったら、のんびり余生をすごすんですかねえ」

そうきくと、少し戸惑ったようになって彼女は言った。

「……あまり想像できませんね」

「引退、なんて」

僕達の世界では、非常に稀なケースではある。決して目の前が確かなわけではない、不安定な職業。特殊な職種。

身を退くときは、身が終わるとき、か。

引退なんて、そんな甘ったるい未来は……僕達には過ぎたことだろうか。

その手を真つ赤に染めた、僕達には……

「マモリさん……」

「何でしょう」

「人を、殺したことはありませんか」

「……」

その顔は、軽く微笑みさえしていて。

「ありますよ」

「あなた程では、ないですけど」

「……お互い、大変ですね」

「お嬢様を守るためならば、致し方ないことです」

……

「私は、お嬢様に幸せになって欲しいのです」

どんな思いが、そこにあるかなんて……そんなことはどうでも良い

ことだ。

他人の事情なんて、僕には関係ないのだから。

僕は、何もきかなかった。彼女がなぜ天童に仕えるのか。どんな思いで、血塗られた一族の娘を慕うのか。

その笑顔が妙に魅惑的で、そんな彼女に僕は何もきけなかつた……

……



## 9 / 相思相愛

「お姉ちゃん、お姉ちゃん。今度の獲物はどんな人？ 男の人？ それとも女の人？ ねえねえお姉ちゃん。ねえったら」

ゆさゆさと私の肩を揺するのは、私の可愛い可愛い妹だった。

「女の子よ。あなたと同じくらいの、綺麗な女の子。ほら、あなたも知っているでしょう？ 天童の一人娘よ。お金持ちのお嬢様ね。血塗られた一族の、呪われた女の子」

私はそんなふうに言っけさせた。私の肩程にひよっこりと覗く頭に。

「私と同じ、くらい？」

「そうよ、あなたと同じくらい。もしかして、自分と同じようなことを、斬るのはやだ？」

そんなことがあるわけないということは知っている。私の知る妹は、そんなことでは動じない。そんなことでは変わらない。

「あは、ははは。ふう、あはは」

彼女は、私が最初から真面目になどきいていないということに気付いていたのかどうなのか、笑って誤魔化すばかり。見ていて飽きない笑顔。

その顔に咲かすばかり……………

「あなたは本当に可愛いわね」

「……ん？ なに、お姉ちゃん何か言った？」

「あなたは本当に可愛いわね」

そうして、その頭を撫でる。長い髪をすく。生まれつきの金色の口  
ングヘアー。

「う、うあ。ちょっと、やめてよくすぐったい」

言いながらも、力のない否定であった。重なる体と同じように、距離の感じられない心と心。それは長年共に生きた者同士にのみ生まれる、お互いに遠慮のない関係。

私と妹は、言わば相棒だ。一緒に仕事をする、姉妹。血が繋がって  
いなくとも、心が繋がっていればその必要はない。

私は彼女の為に、彼女は私の為に。お互いをお互いに、生きるため  
に寄り添う。

生きるために指令を執行する。他の何を犠牲にしても、彼女だけは  
失いたくない。

私だけの、彼女。彼女だけの私。

「……でも」

そうだ、今回は。

「なあに、お姉ちゃん」

「私達の邪魔をしようという人がいるの」

「邪魔？ ん〜、なにかな。それって、邪魔なんて……変なの」

彼女には、理解できないのだろう。自分がすることが間違ったことなんて、考えもしない彼女には、自分の邪魔をするなんていう思考がそもそも理解しえないのだろう。

それでいい。それでこそその彼女だ。それでこそその妹だ。彼女は、そうでなければならぬ。

「その人も、同じようにしてあげなさい。同じように、バラバラに、斬って斬って斬って斬って斬って斬ってあげなさい」

私達の前を遮る障害物は、バラバラに、バラバラに、斬って 斬って 斬り刻むのみ。

跡形もなく、そこに一滴の血さえ残さずに。脚を斬って、腕を斬って、首を斬ってさしあげよう。

「これが終わったら、どこか遊びにいこうよ〜。服とか買って、甘いもの食べて、いっぱい、いっぱい、遊びたいよ〜」

「ええ、もちろん。何でも買ってあげるし、どこへでも連れていくわ。遊園地でも、動物園でも、映画館でも、どこへでも……」

いつまでも、一緒。ずっと、ずっと、ずっと一緒。私達は、姉妹な

のだから。

血が繋がっていなくとも、心が繋がって いれば、その必要はない。血が繋がった者同士でさえ、これだけ強い繋がりがあるかどうか。

それを思えば、上っ面だけなぞったような、友達だとか、友情だとか、そんな薄っぺらいもののなんと浅いことか。

この世のなんと、つまらないことか。偽りに満ちた、紛い物だらけの世界。その中でも、私達だけは違う。

生と死。その狭間で、ギリギリの瀬戸際で、互いの体を……心を預け合う同士。

私が欠けても、彼女が欠けても成立しない、二人で一人の名前。

二人で共有する、この世の裏側で犇めく誰もが恐れる名前。

私達は、斬って捨てる。そこからついた名。誰かが付けた名。いつの間にか、彼等は私達をそう呼ぶようになった。

私達姉妹を……《切断魔》と。

切り断つ魔ゆえに、切断魔。

二人で一つの名前。畏怖をもって囁かれる、裏に生きる者達が、その名をきけばすぐに、自分の手足がそこにあるかどうか確かめなければ気が済まない。

そんな象徴にまで、その名はなつた。

したくてその名を、上げたわけではないけれど。どこまでも、この世界に、私達の愛を、確かなものとするには、もっと欲しい。生きている実感、殺すという実感。同じ人間の生命を、その手のひらで遊ぶ。

そんな所業。神に近き所業。私達は、誰よりも、何よりも、強くそして美しい愛を……

「愛しているわ。私の可愛い可愛い、あなた」

「……うんっ、私もお姉ちゃんが大好きだよっ」

嗚呼、私は本当に幸せ。

## 10 / 百鬼夜行(前)

待ちきれないという意味の四字熟語に、《一日千秋》というのがあ  
る。

読んで字のごとく、一日が千の秋に匹敵する程に待ち焦がれている  
という意味だ。おいおいオーバーだなあなんて、言うのはやめてお  
け。

ジャパニーズ、ラングエッジは往々にして曖昧であり、それでいて  
大げさであるものだ。それくらい、あやふやなものである。

それだけ奥が深いという風にもとれるだろう。複雑なのは悪いばか  
りではない。

ところで、何を急にそんないきなりな、わけわかんねえよお前何言  
つてんの、なんて思わないでほしい。これは今の状況にぴったり当  
てはまることなのだから。

……遅いのである。そりゃあ待ち合わせしているわけではないのだ  
か、それにしだってこれはどうしたことだろう。

まさか情報に誤りがあるなんて、そんなはずがないのだが。切断魔  
は一向に現れない。

……一カ月、である。それだけの日が過ぎた。とばしてしまつくら  
い平々凡々にして、味気ない時間は気がつくとあつという間だ。

何も無かつたわけではないが、何かがあったのかと言われれば、そ

それはそれで答えが見つからない、そんな日々。

アカリとデートしたり（室内）、アカリと手を繋いだり（恋人つなぎじゃない方）、アカリといちゃいちゃしたり（恋人ごっこ）、そんな日々が過ぎて……それが日常になった頃。

忘れた頃にやってきた。待たせておいて、挨拶もなしに。彼女達はやってきた。

切り裂くように、切断し。行き交うように、切断し。通り過ぎると、そこには断片が並び。その道には草木残さず切り裂かれ。

腕を斬り、脚を斬り、首を斬り、命を裂く破壊者。

五体を剥奪し、生命を剥奪する殺戮の天使。

ならぬ殺戮の姉妹。二人で一つのその名。

今では彼女達を、彼等はこう呼ぶ、《切断魔》と……………

ホテルの一室。相も変わらず豪華スイートルーム。溜め息さえ遠慮に駆られるような豪華な家具や装飾。

それはまるで、主人の使用を健気に待つ有能なメイドのようなかしこまりようだ。

本当のメイドがそこにいるのが彼等の不運か。どんな豪華な家具も装飾も、この人のまえでは霞むしかない。

視線に気付かれたのか、こちらを伺うようにする彼女。

「どうかしましたか？」

「いや、別に……」

マモリさんは、今日も昨日と変わらない。事務的な受け答えは、やはりいつも通りの彼女だ。

ひと月も共に過ごせば、いつも通りなんて言葉も出てくるというものだ。

それだけの、浅くない関係が築かれたということだろうか。

「……ふー、ダメだなあ。全然ダメ。まあ、なんでだろ」

「アカリ弱すぎだろ。くじ運とかいうレベルじゃないってそれ。センスだよセンス」

「……うう、ひどいよう。なんで……なんでかなあ」

「こういうの、弱いってまずいんじゃないの？ 天童が。経営学とかに通じるものがあるから。こういうゲームって」

「大丈夫ですお嬢様。わたしがお嬢様を勝たせてみせますから」

「だから何であんたさつきから協力して戦ってたんだよ！ 何で二対一なんだよ！ さつきからなんかおかしいと思ったよ！」



「うっ、2がこないよう」

大富豪をやっていた。トランプで大富豪をやっていた。

「来ないって、三人だぞ。三人しかいないのに、四枚あるカードがこないって……しかも今で誰が持つてるのか分かつちゃったじゃん！」

僕の手札にスペードの2が一枚……

うわあ三枚持つてるよあの人。あとジョーカーも。

もう決まったようなものじゃん。

「……でも」

このゲームではスペサンルールを採用している。スペードの3がジョーカーに勝てるというルールだ。

通常なら敵無しのジョーカーが、絶対のカードではなくなる。より駆け引きが増すわけだ。

今僕の手札にはスペードの3はない。ということはアカリの手札にそれがある確率は、単純計算で五分五分だ。(三人というのは、こっとういうときにある程度予測が成り立ってしまうのがつまらない)

ならばアカリが、マモリさんのジョーカーを止め、ついで革命などでカードの強弱を逆転できれば、まだ分からない。

よし、ならばここはマモリさんがジョーカーを使つざるを得ないよ

うな状況を演出することだ。

アカリが革命してくれれば、僕の手札で眠っている3や4達が猛威を振るうことになる。ふふふ、まっている。あなたの手札に温存された最強の三銃士は、今に最弱の奴隷に成り下がるのだ。

ざわざわ、ざわざわ……

場にはアカリの渾身の1が今出された。それをテーブルの上に置く手が震えていた。文字通り最終戦略らしい。

順番はアカリ、僕、マモリさんの順番で時計回りだ。つまりここで僕が2を出せば、マモリさんはジョーカー以外を出すことができない。

だがもちろん警戒され、ジョーカーを握り込まれてしまう恐れもあるか。ならばここは……

「……………」

「……………なんですか」

「……………いや」

視線攻撃。ここで僕の2が通れば、マモリさんに不利な状況が訪れるのだと、そういう思い込みを与えることができれば……

そして2を出した。さあ、マモリさん……出せ、ジョーカーを。

「……………」

じーつと、こちらを伺つマモリさん。うっ、気付かれたか。やっぱ駄目か？

「……く」

そこで、マモリさんがカードを出す。

紛れもない、ジョーカーを！！

よし、いけ僕のアカリ！！

今こそお前の真の力を見せてやれ！ さあ、さあさあ。

「……え、なに？」

僕の期待の視線に戸惑う彼女。あれ、何してんだ。何をぼけっとしてんだよ。

「スペサン私持ってます。2トリ、階段革命です。スペサン上がりなしでしたよね。スペサン、階段。上がりです」

「やっぱあんたか……」

やっぱりマモリさんだった。恐ろしい引き運だった。

ジョーカー、2が三枚、スペサン、階段革命に階段って……いくら三人プレイで手札が多いからって。

ギャンブラーかよこの人。

「けどまあ続けるか。次、アカリ」

「え、あうん」

マモリさんが上がったので、場のカードが流れる。（これについては、場にカードが残るルールもある）

アカリは無難に10をだす。革命した後でも、その前にもぱっとしないカードだ。

ええと、次は……あ、あー。うーん、ああ。

「僕も上がりだ」

3ダブ、4ダブ、8流し、階段。

革命したから手が強いんだ。3はもう全部見えてるし。

「……………」

呆然とするアカリ。開けた口が塞がらない。もっとも、この光景は今に始まったことではなかった。

「またこの順位ですか、面白くありませんね」

「ちょっと、サクラさん味方してくれるんじゃないのっつっつ？

「！」

「……………すみません、2が無いのなら革命すればいいかと……………」

3も持つてなかったわけだ。大富豪ではイマイチ使いづらい、中途半端な強さのカードばかり引いたのか。

大丈夫なのか、天童財閥……。こんなんで本当に……

「うう、おかしい。おかしいおかしいおかしい。このトランプなんか変だよ。きっとシャッフルした人がズルを……」

「いやお前しかシャッフルしてない」

負けた人が次のカードを準備する決まりにしているからだ。

墓穴を自分で掘る彼女。

「……うう、トランプって難しい……」

「そんなことないと思うけど……」

そんなとき、山の中からふとカードを一枚手にとった。

彼女の《ズル》という言葉に反応したのか、それとも何の意味もなくそうしたのは分からない。

とにかく僕は一枚のカードを手にとったのだ。

裏向きのそのカードを、何とはなしに反対にめくってみた。……するど。

それは先程問題になったスペードの3、だった。

正確には、スペードの3の切れ端だった。

……あれ、なんだ。キョロキョロと下の方を伺うと、もう一つの切れ端が落ちている。

拾い上げ、手元の切れ端と合わせてみるとその断面は一致。

「……なんか切れてるんだけど」

スペードの3が真っ二つになっていた。

「え、なんで？ ……」

……ホントだ。えー怖い、なんでそんな綺麗に切れて……」

「……変ですね」

……一瞬、それを疑ったが、考えて思い直す。それはないか。僕のあれは、これとは違う。

ならこれはどうしたことだろう。もともと切れ目が入ってたとか、……何にしても不思議な話だ。

「……ふあゝ眠いよ。もうトランプはいいや」

「……ああ」

「お休みになりますかお嬢様？」

「うん」

テーブルの上を片付けるマモリさん。そしてベッドの準備を始めた。

……僕は真っ二つになったスピードを見つめ、考える。

そんなこんなで、なんやかんやで、また一つ過ぎる一日。過ぎようとしてる一日。

長い一日はまだ終わらずに、そして始まったばかりだ。

地獄のような一晩は、これから始まりを告げようとしていた。

11 / 百鬼夜行(中)

「……マモリさん」

「……やはり、そうなんでしょうか。そういう、ことなんですか」

スウースウー。寝付きのいい奴だよな。もう夢の中か。夢の中で、どんな夢をみているのだろうか。

せめて、幸せな夢だったらいい。

普通で、些細で、それでいて何気ない、そんな幸せな夢を……

せめて、彼女の知らないところで、何もかも終わればいい。

部屋の隅に置かれたベッドを囲むようにして、二人は立つ。

息を殺し、気配を殺してただ待つ。じっと待つ。

しかしそこには、彼女の寝息以外にはなく、マモリさんにはやはり何も感じられないようだが……

「ここで待っていてください」

「……」

無言で頷く彼女。



ひたひたと、スニーカーの足音をなるべく立てずに、部屋の入り口へ。

ガチャリと、音を立てて開く。すると、そこには……

ガチャン……

「……どうかしましたか」

「……」

開けてすぐに閉められたらドアからは、もう一度無機質な音がして。

彼女達の方を振り返る。

「……きました」

彼女の表情が、変わった。一変した。それは僕が、初めて彼女と出会ったとき、一戦を交えたそのときのそれに酷似していた。

主を脅かす存在に向けての、敵意だろうか。

「警備員さんが、倒れています」

部屋前に配備されていた、されていたはずの警備員が一人残らず、倒されていた。

……その五体を奪われて。

「……」

こうなった以上、ここは戦場だ。殺意の交錯する、フィールドだ。誰一人、安全はない。

天童財閥総帥の天童清と、その夫人であり、アカリの母親でもある天童岬には、別のエージェントがついていて、今はこの建物にはいない。

……ここで終わらせてやる。

すたすたと、彼女達の待つベッドまで戻り、もう一度ドアに向き直る。

「……います」

「……私はどうすれば」

「アカリを庇ってください」

無言で頷く彼女。利口で助かる。

ガ……チャ……

少しだけ、本当に少しだけ、僅かだけ開く扉。

その僅かばかりの隙間から、覗くものがあつた。

……金？

金色の、サラサラした何かが、その隙間に見えた。気がした。

ギィッと、更に開かれる扉。露わになる人影。出現する殺意。しかし僕は一瞬、その姿を見失った。

というか、見誤った。それは、人影の背丈が異様にも、低かったからである。

「……………」

それは小さな女の子だった。小さな、少女だった。

だが、どうやら外見程若いというわけでもなさそうだ。背丈は低いが、それに人形のような顔が妙にマッチしていて、独特の雰囲気を感じさせる少女だった。

長い、そして息を呑む程に綺麗な金髪をなびかせて、彼女はいそいそと入ってきた。

「こんばんわ、お兄ちゃん。こんばんわ、お姉ちゃん」

「……………」

「……………」

僕達は、その少女から目を離さない。無言のまま、ただ見つめる。

「ねえねえ、お兄ちゃん、お姉ちゃん。一緒に遊ぼうよ。楽しいこととして遊ぼうよ。お遊びお遊び、きつと楽しいよ〜」

「……」

これが、あの《切断魔》か。悪名高き、その名の正体か。

裏の者達を震え上がらせる、畏怖の対象なのか。

女の子、かよ。

別に男だと思い込んでいたわけではない。そういうこともあるかもしれないと、考えていたつもりだ。しかし、

こんな少女がああ悪魔だと、誰が予想するだろうか。

こんな握れば折れてしまいそうな、か弱き存在を、誰が見抜けるか。

これが《切断魔》だなんて。

……スペックが見えない。掴み所が見えてこない。

こいつはどうやって、決して弱くはない警備員達を……

皆殺しにしたというのだ。力が違う、体力が違う、性能が違う、リ  
ーチが違う。

ならば、何らかの何か。僕のような、何かか。

「よう、お兄ちゃん仕事中だからよ。悪いけど、お前とは遊べない  
んだ」

「……え、やだやだやだやだ。遊ぶの、絶対ぜえ〜つたい遊ぶ

の」

「……こんな少女が、」

隣でマモリさんは、冷静ながらもその顔に驚愕を浮かべていた。

「……まあ、外見だけじゃあ中身は計れないって、言いますしね」

ドアの側で未だにじたばたと、子供のように地団駄を踏むばかりの少女。いや実際子供なのかもしれないが……

「うっ、遊んでくれなきやだ。遊んで、遊んで、遊んでくれなきや……」

少女の口端が、不気味につり上がる。

「斬っちゃうよ」

！？ 瞬間、空を斬るような音がして、僕はとっさに前へ出る。

アカリを庇うマモリさんを更に庇うようにして、前へ出る。

そして次の瞬間……ガシツ！？

流石に僕は、それに驚きを隠せない。

唐突に起きたそれに、ぼくは驚愕を隠せない。

反射的に左側に目をやれば、僕の左腕を何者かが……掴んでいるっ  
っっ！？

「!?!」

寒気がした。全身に回る血液が一瞬で凍りついた気がした。

死を寸前で見たような、ギリギリもギリギリ。限界も限界。

そして前からの殺気を、僕は避けられない……

「ぐああああああ、あああああああああつっ!?!」

左腕に走る、神経を狂わせるような激痛。鋭い異物が、体内に侵入するような感覚。

そして自身の一部が、剥奪されたことが分かる。

「……………ぐおっっ、つっ……………あ、うっ。」

「キリコさんっっ!?!」

後ろで僕の名を叫ぶマモリさん。おお、なんかいいな。地味に快感だ。

「……………こないで、ください……………」

いきなり食らうとは思わなかった。先手を取られるとは思わなかった。

それもそのはず、誰にだって責められることではない。

「まずは左腕、頂きました」

そしていつの間にか、その位置を金髪の少女と共にしている彼女。

僕の腕を、僕の腕だった腕を、まるでペン回しでもするようにクルクルとさせて、そう僕に言った。

「あはは、うふふ。キャハハハ、キャハハハ」

笑い声が次第に、高いそれへと変わっていく金髪少女。その手には一体どこから取り出したのかというような、巨大な斧を持っていた。両手でしっかりと、握っている。よく見れば赤い液体で濡れる斧を、握っていた。

僕の腕だった腕をそんな風に弄ぶ突然現れた彼女は、今の今までこの部屋には存在すらしていなかったはずの人物だった。

背丈は金髪の少女より頭一つ二つ高いくらいか。髪は茶色がかっていて、短く切りそろえてある。

その髪の毛から覗く顔だけを見れば、それは都会を歩いても遜色ないような、普通の女の子のよう。

片手でそんな物をクルクルと回していなければ、という話だけれど。

「お返しします」

そんなことを言って、僕の腕だった腕を、乱雑にこちらへと投げつける。

ゴトツと、そんな音を立てて僕の足元まで転がってきて止まる肉塊。異様に綺麗な切断面をこちらに向けて、それは僕の足元にあった。

「……………」

その二人は、少し離れた前方に寄り添うように立っていた。

敵にダメージを与えたことで、その様子を伺うようにしていた。

やはりプロフェッショナルだ。

この二人が、《切断魔》。

それにしても、あのお姉さんは一体どこから…………

あれがなければ、当たる方が難しい攻撃だった。あんな単調な、ストリートな攻撃を食らうなんて、有り得ない。

他の奴ならともかく、この僕に限っては有り得ない。

突如として現れたその存在に、全く気付けなかった。

拘束された左腕は、いとも簡単に切断された。金髪の少女の振り下ろす狂気を、まともに受けてしまった。

気配を感じなかった…………。そういう奴なのか。それはつまり、気配を消すことを得意とする…………暗殺者のような、ものか。

隣ではマモリさんが、突然現れたもう一人の少女の存在に戸惑うば



かり。

それでも主を守ろうとする意志は確かにあるようで、後ろを気にしながらではあったが。

……確かにあのドアが開いたのは一度きりだ。開いた扉を、あの斧を持った金髪少女は閉めていたから、入り込むとしたらその時か……それとも……

「……あなたが扉を開けたときに、お邪魔しました」

僕の思考を読まれたのか、それともたまたまなのか、彼女はそう付け加えた。

「……僕が、開けたときに？」

もしそれが本当なら、僕はそれに気付けなかったことになる。

「ずっと後ろにいました」

……気配を殺すことに長けたプロフェッショナル、というところか。

斧による切断を金髪少女に任せ、自分はそれをサポートする相棒。

相手に悟られず、後ろをとって確実に攻撃を当てる戦略。

……やばいのはこっちの方だな。金髪の方は、一人ならどうとでもなる。

そんな風に冷静に分析しながら、僕は足元に落ちている僕の腕だっ

た腕を手取る。

「……あなたは狂わないんですね」

相棒の少女は言った。

「腕の一本でも失えば、大抵の者は精神を折られて立つこともできないのですが……」

まして戦い続けることなどとても……

と言った。それは確かにそうだろう。

僕は自分の左腕があつた場所を見る。鋭利な切れ口。流れる血液。おびただしい流血。血、血、血。

このままでは失血だけでも死にそうだ。少しずつ意識が遠くなっていくのが分かった。

「まあ僕も、プロだからね」

そんな言い訳は、半分ほどしか的を射ていない。

僕が未だに正気を保っているのは、別に理由があるのだ。

僕は、右手で切断された《元》左腕のその切断面を……元にそれが存在していたまさにそこへ、血の流れ続ける切り口へと合わせ、繋ぎ目を右手で繋ぐように隠した。

その行為に疑問を抱いたのか、茶色の髪の少女が言う。

「……何をしているんですか」

当然の反応だろう。僕のその行為は、あまりにも意味不明だったからだ。壊れたガラスの破片を合わせるような、そんな行為。

「……そんなことをしても、仕方ないですよ」

「いやいや、そんなことはないよ」

僕は笑う。

「……………」

「《切断魔》ちゃん。ブラックジャックって、読んだことある?」

「……………は?」

唐突に荒唐無稽なそんな問いに、彼女は理解できないという様子。

「ブラックジャックだよ。漫画漫画。闇医者が沢ありの患者を治していくっていう……昔の漫画」

「それがどうしたんですか」

金髪少女は沈黙し、マモリさんはやはり沈黙し、そんな中で僕達は言葉を交わす。

「その中で、よく千切れちゃった脚とか腕とかを……手術でくっつける話があるんだよね」

「闇医者ならその腕を元通りにできると……?」

首を傾げる彼女。

「違う違う。そんな必要もないのさ。もっと簡単。簡単な話」

僕は笑う。

「よく分かりませんが、既に片腕であるあなたに……いかにあの《斬離虎》であろうとも、敵ではありません」

彼女は後ろ手で金髪少女にサインのようなものをした。それを受けて金髪少女が動く。

身長に不釣り合いなその巨大な斧を構え、（よく見れば背中にホルダーのようなものが装着しており、さっきまで手ぶらに見えたのはそのせいだ）

臨戦態勢。彼女がそれを望めば、いとも簡単に僕のもう片方の腕は失われるだろう。

「やっておしまい」

「斬る斬る斬るっっっ!!」

速い。その外見と相反するように、身体能力は高いようだ。

閃光のように走り、次の瞬間には目の前に彼女の姿があり、金色の髪の毛がなびく。

「くつつ!?!」

後ろでマモリさんがそんな声を上げていた。

けれど僕は意に介さない。迫り来る狂気を眼前にすえ、冷静に行動。

左手で、彼女が斧を持つ両腕を止めた。

左手で。

## 12 / 百鬼夜行（後）

「!?!」

渾身の一撃を防がれたというよりは、何故それが起こったのかわからないというような当惑。

そんな表情を、金髪少女は浮かべて動けない。

僕は左手で彼女の斧を持つ両腕を止め、戸惑うばかりの彼女をよそに、もう右手による更なる拘束をかける。

指を絡ませ、爪を食い込ませ、彼女の全身の動きさえ奪い、そうやってしまえばその斧は、ただの飾りだった。

「……なんで」

「くっ、ああ。はなせっ、はなしてっっ、いたいよおっっっ!!」

その後ろには、その瞳に信じられないもの映しているような顔で、立ち尽くす彼女。

僕の拘束に自由を奪われている、金髪少女は子供のようじじたばたと暴れるが、それはどこか力ない。

「……………」

後ろでは、マモリさんまでもが言葉を失っている。

「あれ、どうしたかな？ あの《切断魔》っていうのは、僕みたいな細腕でさえ止められる程度のものなのかい？」

そんな風に、毒づいてみた。

すると、後ろで未だ困惑から抜け出せないでいる彼女が、僕の言葉を返して返す。

「……違う、違う。なんで……どうして。いや、そんなはず……あなた、なんで」

「ん？ ああ、この腕のことかい」

僕は、彼女によく見えるように身体を擦った。

そのつなぎ目がはっきりと見えるように、彼女によく見えるように。

薄い傷跡のようなものを辛うじて残した、完全に元通りの左腕を……。

「……どんな、手を……。何をっ、一体何をしたっ!？」

今までの冷静なそれとはまるで違った彼女の言動。

「よかったなあ。あんなに綺麗にぶった斬ってくれちゃうから、もしかしてくつつかないかもと思っただけど、杞憂だったみたいだ」

「だからつつっ!？」

はぐらかすように、真面目に取り合わない僕に向かって彼女は、も

う奇立ちを隠さない。隠せない。

「なんでっ、なんでどうしてそんなっっっ!?!?」

「うるさいよお前」

「……………!?!?」

ぎりぎりと、金髪少女を抑えながらの会話だったけれど……………僕ははつきりと言っ。

「……………君達は一切、この僕を何だと思っっていたというのかな。どうやら僕がここにいることは知っっていたみたいだけど……………それでのこのやってきたというのなら、君達はとても愚かだ」

僕だって、プロなんだぜ。

プロフェッショナル、煉獄の修羅、《斬離虎》。自分でいうのもなんだけど、それなりに名の知れた、恐れられたら三文字だ。

「普通の人間だとしても、思っただのかっつっの」

「っ……………!?!?」

そして、無感情に執行。情けない、容赦の欠片もなくそれを、する。

「くあっ、ああっっ。いやあああっっっ、きゃあああああっっっ  
っ!?!?」

ごきっつと、明らかに人体の損傷が聞いてとれる音を、金髪少女の腕



がたてる。

僕は、彼女の右腕を握っていた自分の左腕で《いつものこと》をした。すると当然のように……

ついでポトツという、柔らかい何かが床に叩きつけられる音がして、そこに目をやれば。

……やれば、金髪少女の足元に何かが落ちている。

肌色はその面積の殆どを占め、しかしその先端には更に先をえぐり取られたような、痕跡と共に赤い液体が……

「……………つつつ???’」

彼女の右手は、在るべき場所には既になかった。

そして物理法則に則り、巨大な斧がそのウエイトを支えるものが無くなり、重量に沈んでいく。

床に重く突き刺さるような音。それは彼女の腕だった腕が転がるすぐ隣の床に、まさに突き刺さっていた。

「あ、ああ。うっ、うああ。腕が……腕があつつつ!?’」

「ふう、まずは一本」

そうして軽く息を吐き、僕は彼女の身体を前に向かって押しやる。

するとその小さな矮躯は、なんの抵抗もなくバランスを崩し、後方

に突き飛ばされる。

やはりいくら身体能力が外れていても、身体その物は未熟なそれだ。崩れ落ちる金髪少女を、辛うじて受け止める彼女。その凶はあまりにも無防備で、やろうと思えばそこで終わっていたかもしれない。けれど……

あえて僕は、そうしなかった。

「お姉ちゃん……お、姉ちゃん。うつつ、いたい。……痛いよう」

「……可哀想に、大丈夫？ 痛いわよね。本当に、本当に……ごめんなさい。本当に……ごめんなさい。私に……ごめんなさい。私のせいだわ」

私の、せい……。

そう言った。

「こんな傷跡、有り得ない。まるで万力にでもねじ切られたような、切断面とは違う。なんで、どうしてこんな……」

彼女がそう言うのも当然のことだった。

人の身体というのは、豆腐やパンのように単純な構造ではない。単純な構成ではない。

まして腕などは、肉、神経、皮、そして骨が入り混じる。本来ならば、斬ってきれるような形態にないのだ。

それこそ斧でもない限り、……それにしたって、大変な重労働だろう。何回も何回も、吹き出す血液を、溢れ出す臓物に目をつむりながらの作業。

一太刀で斬り伏せる、金髪少女の方が異常なのだ。

いくら少女の体型のそれに、強度や耐久力が低いということがあったとは言え……握力だけで人間の腕を切断するなど、ましてねじ切るなんてできるはずが……

そんなことを、彼女は考えているのだろう。《切断魔》の片割れであり、人体掌握に長けているからこそ、目の前の現実を疑う。

あつてはならないこと。起きてはいけないこと。

「……あなたは化け物ですか」

「あーもうだからうつせーつつの。僕はだから人間だって……」

髪の毛をくしゃくしゃと、むしゃくしゃした自分を卑下するように。急に彼女の態度に腹が立った。

「実はさあ、今回は僕の方からも、君達を……最も《達》だなんて思わなかったけれど、待っていたというか……待ち構えていたんだよね」

「……どうして、ですか」

金髪少女の身体を支える彼女のその顔には、先程までの冷静さは消えていて、既に余裕はない。

もう最初のように気配を消すような芸当は、使えないはずだ。

「君達さあ、五体を奪って殺すんだってねえ。本当に、正気を疑うぜ。手足つてのは、人間にとって命の次の次くらいに、重要なものだろうよ。生きていたって、それがなけりゃどんなに明るい人生だつて、たかがしれているさ」

自分の脚で歩けない、自分の手で掴めない人生なんて……その先に何があるっていうんだ。

彼女は、僕の言葉に意義を唱えた。

「あなただつて、今したじゃないですか……」

「だからさあ、僕はずっと言いたかったんだよ。この日を待っていたと、言ってもいい」

プロフェッショナルの、プライドか。

「……僕の《やり方》、真似すんじゃないよ」

僕のが、先だ。

と言った。宣言するよつに、高らかと。訴えるよつに、高らかと。

「は？ え、何を……」

「殺し方を、返してもらおう」

専売特許は、僕の方だ。お前らは、僕の偽物に過ぎない。

「……………」

それを受けて、彼女の僕を見据える表情が変わる。

自分の中の大切な何かを、傷つけられたような顔で。

それだけは譲れない、プロとしての、何よりも自分というアイデンティティを。

尊厳を守る為に。

「ごめんね。ちょっとだけここで、ここで待っててね」

腕の中の大切な存在に、優しくも弱くはない声でそう言う。

「お姉ちゃん……………」

「お姉ちゃんは、やらないといけないの。例え駄目になることが分かっても、できないことが分かっても、下がれないわ」

あなたは逃げて。この化け物の居ないところへ…………

そう言った。

そう言ったけれど、そうして離しかけた…………金髪の少女は。

「お姉ちゃん、一人じゃないよ。私もいるよ。隣にいるよ」

お姉ちゃんと一緒にいく……。

彼女はそれをついに否定できない。愛しい愛しい存在の、そんな言葉が彼女の力になったように。

二人は強く、立ち上がってこちらを向く。金髪少女の残った左腕には、いつの間にかまた斧が握られていた。

……まあそれを拾う彼女の姿は、やはり隙だらけだったのだけど。これ以上は野暮だろう。

「お兄ちゃん、次は負けないからね」

「お初にお目にかかります。私達、二人で一つ、《切断魔》と呼ばれております。以後お見知り置きを……そしてお手あわせ願います」  
金髪少女は慣れない動きでその巨大な斧をこちらに向け、（恐らくは彼女は右利きなのだろう。どことなくぎこちない動きだ）黒い瞳で初めて僕を本当に見たみたい。

その後ろで彼女は、援護に徹するつもりか、両手を構える。やはり覚悟を決めたような瞳を、二つともこちらへと向けてくる。

「暫くの間お預かりしていた、《殺し方》。奪い返せるものならばやってみてくださいまし」

「上等だあ、かかってこいよ！ 《切断魔》 あ！！！」

三人は、同時に笑った。それはまるで人生に最高の何かを見つけたような、清々しささえ伺えて……どことなく楽しそうにも見える。

次の瞬間、巨大な斧が眼前に迫るが……僕は避けない。迎え撃つさ。

それは三人兄妹が仲良くじゃれあうように、見えたらしい。

楽しそうに、ふざけあう三人は殺し合いなんて、そんなことをして  
いるようには、見えなかったのだそうだ。

### 13 / 回想結末

今日も何でもない、何が変わるでもない何一ついつも通りの普通な一日だと……そう思ってた、いた。

今日起きた出来事は、昨日のそれと間違いを探す方が難しかったし、それは明日になれば、やはりそのときにも同じことを思うのだと……そう思ってた。

そしてそれはこの先変わることもなく、似たような日々を生きていく内に人生はいつの間にか終わり……それは誰でもそうなのだと分かっていった。

……

……

……

……

……

……

自分の身体に、昨日は無かったはずのものを見つけた。《それ》はいつの間にかそこにあり、自分の身体中のいたるところに確認できた。

最初は、目がおかしくなったのかと思った。眠れば全て元通りになっているかもしれないと、その日だけ我慢して過ごす。

起きたら今度は増えていた。《それ》は更に僕の身体を蝕む。良い



ものであるはずがないと思った。

《それ》は自分以外の人間の目からは見えないようだ。自分がおかしくなったかもしれないという恐怖に、家族には言い出せない。

しかしこれはきつと、医者がどうこうできる類のものではなかっただろう。どうなっていたところで、無駄だったに違いない。

《それ》は自分以外の人間の身体にも、やがて見えるようになる。

家族、友達、道で行き交う名も知らない人達。そして恋人の身体にも、《それ》は見えるようになる。

他人には見えないものが、自分だけに見えるというのがどうしようもなく、恐ろしかった。

自分はどうなってしまうのかと思った。これは何かの重い病で、自分はそれに犯されてしまい、死が自分を迎えにくるのかと思った。

そんな地獄のような毎日が続く内に、自分はふと思う。それは疲弊しきった、極限まで追い込まれていた自分の精神や、理性の責任にするにはあまりにも酷だっただろう。

《それ》に触れてみた。自分の身体中にはびこる《それ》を、その指で触る。最初は何も起きない。

けれど、少しずつそれがなんなのか、感覚で理解していく。具体的にというよりは、抽象的な理解。

指で弄ると、少し痛む。強く押すと、鈍い激痛が襲う。

徐々に加減が分かっていく。こうすれば、こうなる。ここをこうすれば……そうなる。

そんなことが分かっていく。自分の感覚と《それ》は呼応していった。

少しの快感。やがて自分は、《それ》に魅せられていた。他者には不可能、だが自分にはそれができる。

自分は選ばれた存在なのかと、そう思うとそれは素晴らしい感覚だった。

自分は他人とは違う。それだけのことが、たまらない愉悦。陶醉のような悦楽。

それだけが自分を、救えない人生の中で楽しませた。変わる事になかった自分の人生が、変わったような気がした。

そして暗転する……………

ある日間違った。加減を間違えた。力の入れ方を、間違えた。力の使い方を、間違えた。触れる場所を、違えた。指の角度、深さ。

そうすると、それはほどけた。結び目をほどくように、肉が裂ける。血が流れ、臓物を溢れさせる。

それは恋人の、身体で起こった。痛い痛い、彼女は泣いていたと思う。

それは僕の、二度目の間違い。

豪華な装飾や家具が、赤い血で汚れる中で……バラバラに散らかった肉片は、その原形が知れない程だ。

スウースウー、一人の寝息のみが聞こえる。高級ホテルの最上階、スイートルーム。

そこに一つだけ、辛うじて形を保つ肉体の破片が落ちていた。それは、細長く肌色で……両端から赤い液体。

両端をえぐりとられたような痕跡。

手を握りあう、二組の腕だった。右腕が肩から指先まで……左腕が肘から先まで。とても綺麗な、女性のような白い腕。

まるで姉妹のように、持ち主を失った二本の腕は、お互いの存在を求め合うように……指先を絡めて繋ぎ合う。

きっと行き先が天国でも地獄でも……二人は一緒だろう。

携帯電話のコール音が僕の耳元で響き、それが五、六回続いた後にブツツと違って女性の声が聞こえてくる。

「もしもし、どうだった？ どうなった？ もう終わったの？ 仕事が終わったの？ それとも私達が終わったのかな……」

「……大丈夫ですよ。終わったのは仕事だけです」

そう、それは良かった……と。本当に思っているかどうか怪しい言葉だ。この人はきつと心配なんてしていない。

そういう人じゃない。

「終わったってことは、じゃあ《切断魔》倒しちゃったってこと？  
なのかな」

「……ええ、まあ。」

「ふーん。まあ私は、どうせ大丈夫だと思ってたよ」

君が負けるわけないしね……そう言った。先輩の素直な信頼は、普通に嬉しい。自分が独りじゃないと、思える。

それはとても大切なこと。忘れてはいけないことだ。

「じゃあ後お願いしますよ。ここ、ちらかっちゃってるんで、血とか肉とか……処理班まわしてください。後片付けしないと」

ここで起きたことは、表向きにはなかったことになる。起こらなかった、ことにする。

証拠を隠滅し、痕跡を隠滅し……何もかも、なかったことに……

彼女達の存在は、誰にも知られることなく、消失する。

裏の畏怖すべき《名》が一つ消えたのだから……色々な憶測は流れるだろう。

《切断魔》は負け、その命を奪われた。

「はいはい。分かったよ。ていうか私も行きます。久しぶりに君の顔……見たいしね」

「そですか。じゃあまた後で」

ブツツと、そこで通話は途切れる。そこで後ろから声。

「……私には、何がなんだか、分からないのですけど。ええと、どうやら……これで終わりなんでしょうか」

「ええ、対象の殺戮を遂行しましたので、これにて任務終了。依頼完了。ということになりますね。お互い、お疲れ様です」

マモリさん。先程の一部始終を見届けた一人として、何か思うところがあるらしい。そんな顔をしていた。

「はあ……。あの、キリコさん。これは、聞いてはいけないことな

のかもしれないが……」

神妙な趣になって言う。意味あり気な表情になって言う。

「さっきの腕、左腕。どうやったんですか？ というか、もう色々有りすぎて大変ですよ。人間の人体って、そんなに簡単に、壊せるものなのでしょうか」

細切れになった肉片や血でぐちゃぐちゃに汚れた床に立って、僕達は話している。

マモリさんもさすがというべきか、その状況自体に動じはしない。きつと彼女はいくつもの修羅場を潜ってきたことだろう。

けれど、そんな彼女ですら……僕の《あれ》を未だに受け入れられないらしい。

「無理ですよ。普通はね」

「……………」

「さっきの金髪少女はやっぱり例外ですけどね。あんな小さな身体で、まあ歳は外見ほど若くはなかったようですが……あんなに大きな斧を振り回せること自体、異常ですよ」

規格外、すぎる。

「たぶんあれは、簡単に言ってしまうば……《才能》でしょうね」

「才能って、どういことですか」

「だから、彼女は……物体を切断する才能を持っていたってことですよ」

「……………」

才能、それはあまりにも身近な言葉すぎて、とてもあの美しく、そして狂っていた金髪少女に当てはまらない。

そんなことを思ったのだろう、マモリさんは……

「多分、戦闘訓練だって受けたんだと思いますけど……あのやり方は間違いなく、生まれ持った才でしょうね」

実際……僕も腕一本持っていけましたし。

そう言っつて、左腕の肩から肘の真ん中くらいを撫でるようにする。

そこにはつつすらとだが、まだつなぎ目のような跡が残っていた。

「……………さっきのは、一体。あれは何だったのですか」

それが確信……。一番ききたいことなのだろう。

「言ってみればこれも才能ですよ」

そう言っつて、僕は左腕のつなぎ目に指先を当て……《いつものように》した。

すると軽い痛み。神経が麻痺したような感覚がやってきて、見れば

その腕は……僕の右手の平に乗っていた。

再び、僕の胴体から分断されて……。

「……っっ!？」

「さっきくっつけたばかりだから……今はまだ痛覚が完全に戻って  
ないです。これくらいなら、大丈夫ですよ」

そう言つて、再び左腕の切断面を合わせる。指先で、肉と肉を縫い  
合わせるように……そしてその腕は、僕の胴体に元通りにぶら下が  
っていた。

「人体の《結び目》が、見えるんですよ」

「は？ 結び目って、見えるって……それは一体、どういう？  
ですか？」

疑問だらけのようだが、それが普通だ。僕のこれは実際、病気のよ  
うなものなのだから……

「人間の身体に存在する、言ってみれば《つなぎ目》ですよ。肉の  
繋がりが強いところ、弱いところ。神経の有無。関節の位置。骨の  
バラつき。人間というのは有機物でできていて……どこかが必ず、  
偏っているんですよ」

「それが《結び目》。肉体と肉体の境。ねじれとでも言いましょ  
うか。ぼくは、それを目で見つけることができるんですよ」

マモリさんは、ただ僕の話聞いていた。



「その《結び目》は、ほどけば当然緩む。絡まった捻れをなくせば、当然それはそのままではいられない」

「切断というよりは、ほどくみたいな感じですか。逆に応用してやれば……元通りにくつつけることもできる」

肉と肉を結び合わせるように、肉体と肉体は、簡単に繋がる。

「……………なんでもありですか」

「まあたくさん練習しましたけどね。たくさん失敗もしました」

そしてたくさん、間違った。

「羨ましいです」

「……………」

「私にもっと力があれば、お嬢様をこの手でお守りできたのに……………」

彼女は、悔しさを全面に押し出して……………感情を包み隠さずにぶつけてくる。

「……………こんなもの、なければない方がいい」

「……………キリコさん？」

「……………いや、なんでもないです」

「……………」

「ふあゝ、ううあゝ。あうう、はあ」

そして、僕達の立つその後ろから、そんな眠そうな声がした。

……………まで、これは。

「お嬢様、起こしてしまいましたか」

それは起きもするだろう。今までそうならなかったことがすでにおかしいくらいなのだから。

《裏》のプロフェッショナル達による、喧嘩ならぬ殺し合いのその場においておいて……………呑気に寝息をたてているなんて。

阿鼻叫喚の急転直下に弱肉強食の場において、呑気に寝息をたてているなんて。

《僕達》からしたら笑い物だろう。戦場に裸で飛び出すようなものだ。いや、戦場に裸で居眠りするようなものだ。

しかしだからこそ、彼女はこの喧嘩ならぬ殺し合いの場においておきながら、その魑魅魍魎とは無関係でいられたというか……………

そもそも、実際彼女は自分の命を狙った《彼女達》の姿を見ることがなかったのだが。

いや、姿を見ることはできるのだ。姿というか、残骸というか。



甘かった。考えが甘かった。こうなることは、ちゃんと計算に入れておかなければならなかった。

天童アカリは、天童の人間だ。当然その血を、その才を受け継いでいる。支配者としての素質を。

しかし、彼女はまだ女の子なのだ。どうしようもなく、少女なのだ。大人というには、あまりにも厳しい。

天童としての英才教育だって、受けているだろうし……彼女自身にもその才覚はあるのだろうが、まだそれは知識の域を出ない。

実際にその手で《それ》に触れたわけじゃない。

この光景は、彼女が一人で背負うにはまだ重すぎる。

部屋中に血、血、血。至るところに肉のようなものが散乱し、部屋の中央には二本の腕が唯一形を留めているだけだ。

この現実を、彼女にどう受け入れさせろというのだ。きっと死体だ。ってまだ……見たことさえないはずだろう。

ましてや死体の中身をぶちまけたようなこの惨状に、彼女の精神は耐えられない。

耐えられるはずがない。

「う、う。ひっく、ぐず。ううう。うう、ひっくう。いや、いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや……？」

「お嬢様……」

アカリの身体を抱き、優しく声をかけるマモリさん。それこそまるで、仲のよい姉妹のようだ。

片方のメイド服が、それを完全否定しているけれど。

「いやあ、やだ。血やだ。ううう、あうう。ぐずっ、赤い……。怖いよう、気持ち悪い……。サ、クラさん……」

「大丈夫です、大丈夫ですから……」

「……………」

マモリさんは、少なくとも普通の女の子ではない。年齢は僕より少し上くらいだろうか……。その手を血に染めた、《僕達》側の人間だ。

《僕達》寄りの、人間だ。少なくとも普通の日常を普通に過ごして……普通の感情を普通にかけて生きていくような人間では、彼女はな  
い。

普通が似合わないというなら、彼女だってそうなのだ。

天童の裏側を一手に引き受ける彼女。今までどれだけ、誰の目も届かない場所で……日の当たらない場所で尽くしてきたのか。

そのエプロンドレスは、ただ可憐なだけではないということ。

外人のように整った顔の向こう側に、一体どれ程の思いがあるのだ

ろう。

その瞳に、深い闇を……秘めているのか。

それなのに……そんなことができるか。誰かをその優しさで包み込むような、そんなあまりにも些細な、人間味のある行動。

主の苦しみを、共に苦しもう。主の傷を、共に負おう。主の悲しみを、共に感じよう。

ただの主従関係ではない、特別な繋がりだからこそ……それは簡単に言い表せない関係。

言葉なんかでは、補えない絆。主従を超えた、繋がり。

それは僕には、絶対にできないことだ。

「そう言えば、結局……《彼女達》は誰に雇われて、天童アカリを狙ってきたんだろっ」

「……うーんそれはそうだけど、それはそうかもしれないけど……まあいいじゃない。こうして仕事は終わったんだしさ。《切断魔》を撃破！ したじゃん」

「まあそうなんですけど」

場所は変わらず、高級ホテルの最上階スイートルーム。

まあしかし、部屋中に飛び散る肉片や……部屋中に塗りたいくられたような赤黒い血がそれに相応しいかと言えば、決してそうではなく汚れ一つない、ただ一カ所血や肉で汚れていない場所は、隅に置かれていた豪華な装飾が施されたベッドだけだ。

「それにしても、まさか《切断魔》が……二人組の女の子だったなんてね。私は筋肉ムキムキのオジサンかと思ってた」

そう言えば、またあの質問を《彼女達》にするのを忘れていた。やばいな、なんか僕が四字熟語オタクっていう設定が、初期のキャラみたいになってる気がする。

そんなことはありませんよ。

ほら、サブタイトルだって四字熟語だろ。時々有りもしない四字熟

語を勝手に作っちゃうこともあるけど。

アカリもそうだけど、相思相愛って厳密には四字熟語じゃないんだよな。

四字で熟語ではあるけれど、四字熟語ではないのだ。

「なにしてんの、誰に語りかけてるの？」

「いや、何でもないですよ柳先輩」

部屋の中には、僕と先輩の他に五、六人の人間が《作業》している。

彼等は勿論、《僕達》と同じだ。全員が清掃員のツナギのような服装をしているが、当然ただの清掃員ではない。

《僕達》の戦闘や暗殺によって発生する、こういう場合に後片付けをする専門の人達だ。

通称《処理班》という。僕のように、事後処理が大変な部類の、《やり方》を使う場合……彼等がその後始末をするというわけだ。

僕なんかは、毎回お世話になっている。戦闘になると、見境なくなっちゃうんだよな僕って。

それが、柳先輩の仕事の際、僕と行動を共にしない理由らしい。

そういうときの君って……怖いんだよ。

そんな風に、言われたことがある。



「そう言えば、天童アカリは大丈夫？ さつき大変だったんでしょ。依頼を遂行したって、保護対象の精神が崩壊なんてしたら……本末転っじゃなくて意味ないよ」

なんか言いかけた。いよいよ嫌がられてるな。

四字熟語は素晴らしい日本文化だと思うんだけどな。中々理解してくれる人が現れない。

「もう大丈夫になったと思いますよ。今はマモリさんと、別室で休んでいます。」

「そっか、じゃあもう……終わっただね」

「……ええ。一ヶ月くらい、でしたか。少し楽しかったような気がしますよ」

悪い気はしない。殺し方も取り返し、今回で得たものも多いように思う。マモリさんは綺麗だし、《切断魔》の二人の金髪じゃない方は、結構好みだった。

惜しいことをした。

「楽しかった、て？ それは凄いな。それだけのことが起こっておきながら……それだけのことをしておきながら、楽しかったなんてそんなこと……外れてるよ。君らしいとも言えるかな」

「そうですか」

「まあいいんだけどね。久しぶりって言ったら、私も君と久しぶり

だし。天童の子とか、さっきのメイドさんに夢中になって……私のこと忘れてないかって」

眼鏡を押し上げるような仕草をして、口の両端を吊り上げる彼女。

「そんなわけないですよ。僕は好きですよ、先輩のこと」

「……さらっと言ってくれるね」

まあ嬉しいけどさ。

嘘ではない。先輩は僕にとって、重要な存在で大切な存在だ。嫌いであるはずがない。

好きでないはずがない。

世の中の圧倒的多数の人間が、僕にとって好きでもない嫌いでもない存在であるうがなんであるうが、彼女だけは違うと言える。

姉のような存在だろうか。

「それより柳先輩。そのアカリの暗殺を依頼したのは誰かとか、その理由とかって……やっぱりわからないままなんですか？」

「……突っ込むね。それは君らしくないな。ちょっと意外。別に知らなくていいんじゃないの？ 私達は、プロで……あくまで仕事なんだよ。事情に深入りなんて、するべきじゃない」

そこに何があるうとも、ね。

「……ですよね。私情を挟むな、ですか。すみません、先輩」

「いや、別にいいけどね」

「……そういえば、『彼女達』が狙ってきたのは天童財閥、現総帥の天童清でもなく、その夫人の天童岬でもなく……アカリだったのは、どういうことなんでしょうか」

天童に経済的なダメージを与えたいのなら、将来の後継者を消すよ  
うなやり方は、その効果が少し遅い気がする。

いや、遅すぎる。

天童の破滅を望むのなら、単純に一番上を叩くべきなのだ。

「まあ、確かにね。何かあるんでしょうけど……やっぱりその何か  
には、私達は関係ないわ」

関係すべきじゃないわ……。

「そう、ですね」

本当に、それでいいのか。これで終わっていいのか。

「よし終了。この話しはお終い。今回の報酬は、ケタが違うわよ。  
もう君の仕事用口座に振り込んであるから、後で確認して」

「はい、了解です」

「次の仕事はまだ、入る予定はないから……久しぶりの長期休暇っ

てとこかしら。君ものんびりするといいよ。その腕も、暫くは付け外ししない方がいいね。あんまり見境ないと、寿命を縮めるからね。君の《あれ》は」

「はい、わかりました」

「今度、二人でどこか遊びに行こっか？ 私も休み取れるし、たまには羽目を外したい気分なんだよね。そうだ、デイズニールランド連れてってよ。私行ったことないんだよね」

「わかりましたよ。調べときます」

「うん、それじゃあ……私はもう行くね。先に帰らないといけないのよ」

「はい、お疲れ様です」

うん、またね。

そう言っつて、先輩はドアを開けて出て行った。

そして入れ替わりに誰かが入ってきた。先輩を避けるようにして、軽く会釈を交わし……入れ違いに室内へ入ってくる。

それは、マモリさんだった。別室でアカリの相手をしているはずの、彼女だった。

「アカリは、落ち着きましたか？」

そんなことを、聞いてみた。

「ええ、もう大丈夫ですよ。お嬢様は、そんなに弱い人ではありませんから」

「そう、ですか」

「ええ、それはいいのですが。少し宜しいでしょうか？」

「なんですか？」

「お嬢様が、お呼びです」

まともに外へ出たのは、本当に久しぶりだった。長期間アカリに付きつきりで、あの豪華な堅苦しい部屋にこもりきっていたのだから……新鮮な外の空気は妙に心地よい。

騒がしい昼過ぎの都会には、まるで虫の大群のように人が行き交っていて、自分もその一人だと思ふと嫌になるが。

ホテルから外に出たすぐの大通りを、隣に一人連れて、僕は歩いていた。

天童アカリ。

彼女はいつものドレスを脱ぎ捨て……だからといってそれは別に全裸で街を闊歩しているのでは当然なく、彼女が楽しみたいときによく着ているミニスカートにラフなシャツという姿だった。

「どこに行くんだ？」

「どこか」

「……………」

もうお別れなんですよ？ 仕事が終わったから、もう行っちゃおう  
でしよう？

だったら最後に、恋人ごっここにもう少し付き合ってよ。

最後に……………少しだけ。

ということだった。先程、別室において彼女から頼まれたのは。仕  
事が終了したから、関係はもう切れてしまう。

もう関係ない。彼女と僕は……………無関係だ。なのに、彼女はそんなこ  
とを言ってきた。

僕の隣を、淡々と歩く彼女は、どこからどう見ても、普通の女の子  
にしか見えない。

「私、嫌だったんだよね」

唐突に、彼女は話し始めた。

「私は、そう遠くない未来に……………もうすぐそこにある将来、天童と  
しての人生が始まる。一人の人間としてではなく、《天童》として  
の、ね」

「許嫁の人は、私より……八歳も年上の人なの。まだ会ったことないけど、その人が次世代の天童を担うことになるんだよね。愛情とか、そういうのを期待するのは間違ってると思うよ」

「だから私は、その前に……少しでいいから、一回でいいから、夢を見たかった。凄くなんてなくていい。普通の、些細な、一人の間としての夢を」

そうして彼女は、僕の方に向き直る。

その両目を、真剣なまでのそれにして……二つとも向ける。

「……だから、仕方がないでしょ。仕方がないよね。他にどうしようもなかったんだから。許してくれるでしょ」

「……なんだよ」

彼女は、何でもないことのように、何でもあることを言った。

「私だよ……」

「……」

「だって、そしたら何かが変わると思ったから。これまでとは違うことが、起こると思って」

その表情は、自分を理解してくれるのが当然というような、そんな信頼にも似た……寄りかかってくるような、儂い笑顔。

「生きるか死ぬかなんて、それだけで何か楽しそうじゃん。生きも

死にもせず、人形みたいに《いる》だけじゃなくって……もつとギリギリで、何かを感じたかった」

「だから探した。私を殺してくれる人を、探した。私の全部を滅茶苦茶にしてくれる存在を、求めた」

無理だったみたい、けどね。そう言った。



「……そう」

「……あれ、それだけ？ そうって、呆気ないなあ。もつと何かあるんじゃないの？ 私が、あの《人達》を雇ったんだよ。まあ私が表向きに動くわけにはいかないから、サクラさんに手伝ってもらったけど。とにかく、今回のことを観客席から見てたのは私。もつとも、途中から居眠りしちゃったけど……」

彼女は、それでも続ける。壊れた人形のように、続ける。

「ごめんね。君のしたことは、あんまり意味なくなっちゃったよね。意味がなくなってくるよね。いやもつと謝らなきゃいけない人がいたね。あの部屋で今頃《処理》されてる……死んじゃったからもう謝れないねえ」

「ちよつと危ない橋だったかなあって、思ったのは何回もだったよ。もしもお父さんが誰かが呼んでくるプロの人が、私の見つけた《人達》よりも劣るようなら……私は、そのまま殺されちゃったかもしれないし。死にたかったわけじゃないからねえ。痛いのは嫌いだし、苦しいのは駄目だし。それは少し怖かった」

「サクラさんは、最後まで反対したけど……私の為に折れてくれた。私が、冗談でも酔ってるわけでもなく……本当の本気でそうしたいって、伝えたら許してくれた。そうだね、一番謝らなきゃなのは、サクラさんだね」

「謝るって、何を」

僕は、そんなことを言っていた。苛立ち混じりに、突き放すように言った。

「え？何をって、当たり前じゃない。私一人のわがままに付き合わせて、周りのみんなに迷惑をかけたってことをだよ。やだな、私だってそれがいけないことだって………思ってたつもりだよ。間違ってたって自覚して………」

「お前、何か勘違いしてないか」

僕は、事情に深入りすることを選んだ。プロフェッショナルは、プロフェッショナルであればあるほど、仕事に感傷すべきじゃない。

先輩から、さっき言われたばかりだ。

それなのに、僕はそれに反しようとしている。仕事相手に、干渉しようとしている。必要以上に、干渉しようとしている。

「勘違い……？」

「お前、謝れば済むとでも思ってたのかよ。ごめんなさいって、一言………それで何もかも元通りって、そんな風に考えてるのかよ」

自然強くなる口調。周りの視線を忘れて、ただただ感情的になっていく自分。

分かっていて、それが止まらない。目の前の少女に、一言どころかもっとたくさん言っちゃりたかった。

「何人死んだと思ってる。何人が振り回されたと思ってる。……それはそうだ、人が死ぬなんてことは、大して珍しいことじゃない。一力国で見れば、一世界で見れば……人が命を落とすなんて、それは避けられないことだ。僕だって、その数字を多少なりとも手伝っただからよ。でも話しはそういうことじゃねえ」

その表情を、困惑のそれにして、彼女は僕の言葉を待つ。

「謝って済むなら、警察はいらねえし、ごめんで済むなら、《僕達》はいらねえんだよ！ お前は何も分かってない。《僕達》のことをただ知識として、舐めてかかってんだよ。僕達は、そういうんじゃないんだよ！ 殺せと言われれば殺すし、虐殺しろと言われれば虐殺すんだよ！ 《彼女達》は、お前を殺そうとした。そしてその過程で、僕に殺し返された。今回のことで、一番損な役回りをやらされたのは、あの二人じゃねえか。ふざけんじゃねえ！ 《僕達》はお前の為に、見せ物をやりに来たんじゃねえんだよ！ プロの野球選手を誕生日に呼びつけて、キャッチボールさせる馬鹿がどこにんだよ！」

「……でも、でも私、え……。何で、何よっ！？ 何でどうしてっ、……」

信じていた相手に裏切られたとでもいうような、寄せていた信頼を拒絶されたかのような、そんな表情に変わっていく。

「僕達は、必要とされるからこそ、存在していられんだよ！ 依頼のこない仕事なんて、成立しないだろうが。観客のいないプロ野球なんて、ないだろうが！ 客のいない商売なんてねえ！ その客が裏切っただうすんだよ！ 必要と必要をぶつけるような真似しやがっつっ！ 僕達が《僕達》同士で闘うなんて、そこには矛盾しか生

まれねえんだよ。どちらか一方の必要が……叶わないんだからよ！」

「……うふう、でも……でも」

一旦言葉を切り、感情を高ぶらせた自分を制すると、周りの人混みが皆僕達を見ているのに気づいた。

大通りには未だ多くの通行人が行き交っており、何かを起こせばそれらの注目を集めるだろうことは、容易に察しがついただろう。

しかし、僕は再び声を強く言う。「お前は、どうしたかったんだ!? 何をどう、変えたかったんだよ! 何がどうなって欲しいんだ!? そしてよく考えたか!? 何回も、何回も……何回も何回も考えたか!? それが、本当に正しいことか!! 間違っただけ考えたのかよ!?!」

「……な、何で。う、……は、はは」

彼女は、恐らくずっと、ずっとずっと被ってきた仮面を、偽り続けてきた何かを、全部放り出して……何もかも取り払ったように、胸に手を当てて怒鳴る。

「何でっ、あなたにそんな事、言われなきゃっ……いけないのっ?!?!」

周囲の喧騒が度を超していくことも意に介さずに、彼女は言う。

どうやら周りの野次馬は、恋人同士の別れ話とでも思ったらしい。そういう種類の好奇心な視線が注がれる。

「あなたに、何がわかるってっ……言うのっっ!? 私の何を、知ってるのよっっ!? あなただって、そんな仕事して、昔に失敗したとか言っつてっ、こっちの同情でも、欲しかったんじゃないのっ!? 大変だったね、とか……頑張ったね……とか、言っつて欲しかったんでしょっつ、あなたに言われたくないっつ、そんなことっつっ!!」

彼女のそんな言葉は、浅い挑発だと分かっているながら、僕を無意味に煽っているなんてことは、自明だというのに、僕は……。

「っつ、お前っ!! お前っお前っお前っ、そこまで言うだけのっ、覚悟があるんだろうなあっつ!! 他人の全てと向かい合おうって言う、そんな責任を背負えるんだなっつ!! 僕の全てを否定するつもりでっ、お前の全てを賭けられるってのかよ!!」

「ええ、あなたの全てなんてっつ、簡単に否定してあげるわっつ!! 私の苦しみをっつ、あなたに味あわせてあげたいくらいっつ、わたしが……わたしが、わたしが……今日まで、そしてこれからもっ、どんな思いで生きてきたかっつ、生きていくのかっつ!! 世界の面倒をっつ、見ろっつて言われたこと、あなたにあるっていうのっつ!!」

そんな風に、僕達は怒鳴りあった。子供のように、大人ではないかのように、今までの紛い物の関係を一からやり直すが如く。

何もかも捨て去り、感情を剥き出しにして、お互いをお互いにとっつて敵とし、容赦のない言葉を、ぶっつけ合った。

正直、悪い気はしなかったのだ。自分は、悪い気はしなかったのだ。

こんなにも、手加減をせずに……手抜きをせずに、本当の本気でぶ

つまり合える相手というものを、自分はいつしか失ってしまっていたことに気づいたのだ。

自分はいつでも、どんなときにも、相對するものを見下して、どこか……馬鹿にしている。

本当の意味で向かい合うことを、してこなかった。誰かが自分を睨みつけていたって、自分はそれを無視しただろう。

それが自分という人間なのだと、信じていたというよりは、諦めていたのかもしれない。

諦めないという責任を、負うことに耐えられなかっただけなのかもしれない。

プロだ仕事だといいながらも、それらしいことをいっておきながらも、僕はそういうところ、どこか中途半端だったのかもしれない。

その中途半端ゆえに、僕は彼女の言葉に我を忘れる程にまで乱されたのだろう。心のどこかに、納得いかないことがくすぶっていたのかもしれない。

本当なら、そんな少女の戯言なんて受け流すべきだったのだ。真に受けることなんてせずに、無視を決め込めばいい。

それで終わり。それだけで、終わりだった。

なのに、僕はそうしなかった。いや、そうしなかったのではなく、というよりは……できなかったのだろう。

自分と何処か似た境遇の彼女に、自分を重ねてしまったのだろう。違うようで似た者である彼女の、偽りを捨てた……心からの叫びを、無視できなかった。

苦しみにのたうち回る、自分を見ているようで、放っておけなかった。

鏡に映る傷だらけの姿を見ているようで、無視なんてできなかったのだ。

それもまた、僕の未だに直らない間違いの一つなのだろうけれど……

……

## 17 / 過去残像

「ねえ、サクラさん。そのわたしを守ってくれる人、どんな人なのかなあ。男の人かな？ それとも女の人？」

「男性の方だと聞いています。何でも、その方面に関しては一流の手練れだそうで、《そちら側》では有名な方らしいです。……旦那様が、親交のある組織の者で、相当な人物のようです」

「そっか、じゃあ……わたしはもしかしたら、死なないかもしれないね。救われるかも、分からないね。それはそれは、良いことを聞いたよ」

「……お嬢様は、大丈夫ですよ」

「そうだね、大丈夫かな。わたしも、大丈夫じゃないよりは、そっちの方がいいし」

わたしは、どうしたいのだろう。本当はどうしたいのだろう。

未だに、自分のしたことが正しいことだったのか分からない。間違っていたのかどうか分からない。

それでもわたしが、どうしても……それを止めなかったのは、プラスでもマイナスでもいいから、何かを変えたかったからだろうか。

「お父さんは何て言ってた？ 別に何もないか……。何かなんて、あるわけもないよねごめん。お父さんが相手しているのは、いつだってもっと大きなものだろうしね。個体単位じゃなくて、世界単位



の人間だものね。わたし一人なんかには、端っから標準すら合っていないか」

相手にするしないどころか、立っている場所がまず違う。立っている段がまず違う。

わたしとあの人の世界は、悲しくなる程に、泣きたくなくなってしまくらいに、遠くて。

そんなことに違和感がなくなってしまったわたしは、やはり何処か間違っているのだろう。

「…………お嬢様」

目の前のこの綺麗な従者は、自分のことを気にかけてくれているのだ。家族のことのように、慕ってくれているのだ。

彼女がいることの大きさには、わたし自身…………助けられている。どんなときにも心に思い浮かべることのできる存在は、自分が本当に追い詰められて…………本当の本当に助けが欲しいときに、その手を差し伸べてくれる。

心に手を、差し伸べてくれる。

そんな存在が、側にいるかないかで、人間の人生なんて百八十度狂ってしまうだろう。

二百七十度、狂ってしまうだろう。

わたしが一回転して、元に戻ったような人間であるように。

「その人は、男だったよね。男の子かな、オジサンかな。それともその真ん中くらいかな？ うーん、でもそんな仕事をしているなんて、そうそう若くないか。ちょっとがっかり」

「……………どうでしょう。しかしお嬢様の仰るとおり、やはり《そちら側》を生き抜いてきた、凌ぎを削ってきた者でしょうから、若くはないでしょう」

「そっか、そうだよな。いやいや、別に何も無いよ。けどさ、歳が近い方が……………色々お話しできるかなあって。そうだったらいいなあって」

わたしの周りにいる《歳の近い》人間は、わたしのことを本当に見てくれはしない。

学校に友達もいる。先生方とも、それなりの親交がある。けれど、そのどれもが……………わたしを《わたし》として見てくれない。

《天童》としての、《生徒会長》としてのわたししか見ていない。

見てくれない。

別に、わたしはそれでもいいのだ。そこまでの関係なんて求めてはいない。

そんなものは両親だって与えてはくれなかった。

サクラさんは、わたしを一人じゃないと言う。

けれど、それは孤独じゃないという意味の言葉だろうか。

人は、いつだって困難には一人で立ち向かわなければならぬ。その人間にとって、本当に重要な分岐点において、誰かの助けを求めたことは、間違っているだろう。

でもそれは、孤独とイコールだろうか。

「話しが通じるかどうか、わかりませんが。私達と《彼》では、住む世界が違うのでしょうか……もしかしたら、言語だって、違ってもいいかもしれません」

「……わたしに話せない言語って、あったかなあ」

……一応優等生なので。

「……失礼しました、例えが悪かったようです。私達とは違う世界で、生きてきた者に……私達が当たり前のように使用している《言葉》が通じるでしょうか、ということですよ」

「……まあそれは、しかたないよ」

それはどうしようもない。

「でもさ、どうしよう。好きになっちゃったりして。一目惚れしちゃったりして。世界が違っても、愛は通じるでしょ」

「……御冗談、でしょう」

「……分かってるよ。分かってるサクラさん」

「……………」

確かにそれは、悪い冗談だった。

「……………」

「……………」

「……お二人とも、どうかしましたか」

「……いや」

「……別に」

「……一体何があつたのですか？」

場所は先程までアカリとマモリさんが休んでいた、別室へと変わっている。あの部屋はまだ処理中であるからして、見ていていい気はしないからだ。

死体の中身をぶちまけたような、惨状と化した部屋は、やはり《彼等》に任せるのが最善だろう。

そこに何もなかったことにするのが彼等の仕事。

人間の生きた痕跡でさえ、そこには含まれる。

「ちよつとそこまで、デートしてきました。恋人繋ぎで、いちやいちやしなから……………」

「……そ、そうだね。周りからは、そう見えたかも。キスとか、し

ちやったりして」

「……………」

「本当ですよ。僕達、仲良くベタベタしてました。もう周りの視線が凄くって…………今風に言えばリア充ってやつですかね」

「そうそう、そうだよ。流石《裏》の最高峰っ。時代まで最先端を貫いてるねっ、リアクション充分で、リア充だよなっ」

「…………リアルが充実で、リア充だと思いますが」

突っ込まれた。マモリさんの方が時代を先取りしていた。流行に敏感だった。

ていうかそれくらい僕だって知ってたぞ。

…………まあ天童の身である彼女にはそう言った、普通感覚を求めるのは酷か。まあ僕も最近知っただけだ。

みんなリア充リア充って言うから、何のことかと思ったものだ。

それを知る前は僕だって。

「…………もう、いいですよ。誤魔化さなくなっただって、いいですよ。もう知ってしまったのでしょっ？」

「…………ええ、まあ」

すると、マモリさんは申し訳無さそうにこちらに向き直り、目と目

を合わせた後、頭を軽く下げた。

「私からも、謝らせてください。本当に、申し訳ないです」

「……いや、そんな」

謝るなんてそんな、そんなことをされても……僕はどうすればいいというのだ。

許せばいいのか。許さなければいいのか。あなたはそれを、僕に選べというのか。

「……今更図々しいことだと、分かっています。これは私のエゴです。どうか、どうかお許してください」

「そうですか、それなら……それなら、仕方ないですね」

僕は彼女を、許すことにした。許さないことを、しないことにした。それを選んだ。

「アカリ、じゃあもう終わりだ」

僕は彼女に向き直る。身体のみならず、目を合わせる。

「……………」

「僕は、君を許すよ。ていうか、そもそも僕がどうこうっていう問題じゃないしな。僕じゃない、君がどうこうという話だ」

「許、す……」

彼女は、僕の言葉をそう繰り返した。あたかもそうすることで、言葉の意味を更に噛み締めるように。

「さつき僕は、謝って済むことじゃないなんて言ったけれど、そんなことを言ったところで……どうやったって、取り返しがつくわけじゃないのなら、それはもう仕方ないことだしな」

取り返しのつかない間違いは、もうどうしようもない。

どうすることもできない。

前を向いて、その先へと再び歩き始めるしか、ない。

「もうどうにもならないのなら、どうしようもないのなら、忘れて次に進むしかないよな」

彼女は、手を後ろで組み、恐る恐る僕の方を伺いながら、それでもちらちらと自分の足元に視線を逃がすも、僕に対すると。

「私は、私の前に道があるとすれば、それはきつと、修羅の道」

私の求めるものは、多分見つからない。

「誰かと、大切な人や、仲良くしたい人間ができて、その人は私のことを……一人の人間として見てくれない」

一つの確立した、存在として見る。天童という、二文字だけを見る。



「私は、世界の為に生きなきゃいけない。自分の為に、生きてはならない。他の誰か一人の人間の為に、生きることも許されない。世界は私を許さない」

天童アカリは、諦めたように続ける。自分の生きる世界が、どう見繕ったところで、《普通》なんて言葉が介入する余地がないことを……受け入れるしかない彼女。

「一人の人を愛しても、その人は私を愛さない。当たり前。人は、同じ人しか愛さない。愛せない。私は人としてでなく、《天童》として、《天童アカリ》として生きる。それは、もう自分を捨てるのと同じ」

灯台は、自分を照らせない。灯台は、愛してもらえない。

灯台の元は、暗いように。

「私、いやだよ」

彼女は、吐き出すように言う。

「いやだ。私が私じゃなくなるのは、嫌よ。一人の人間でなくなるのは怖い。天童の二文字が、私という一文字を塗り潰すのが、怖い。いやだ、うっ……いやだよ。助けてよ」

僕は、言う。

「それは依頼か」

「……ぐずっ、ひっく……うっ。い、いらってっ」

「仕事の依頼なのかって、訊いてんだよ」

「……い、依頼なんかじゃ、ない。私の、私が助けてって。あなたも、私を《私》として見てくれないの？」

「依頼じゃないなら、僕は何も出来ないな。僕は、どんな依頼だろうが、ガキの使いだろうが、それが仕事なら引き受ける。でも君のそれは、そうじゃないんだろう」

なら、無理だな。

そう言っつて、僕は部屋の出口へと向かう。

もう、終わりの時間だ。今回は、度が過ぎた。干渉し過ぎた。

もう、駄目だ。

「…あ、うう。ま、まって。まってよ。私は、どうすれば……」

その顔には、溢れるばかりの涙。人間の感情表現の形。悲しいという感情の副産物。

彼女は紛れもない、一人の人間だ。

十六画の二字熟語なんかには、塗りつぶされることはない。

きつと大丈夫だ。

「じゃあな。アカリ」

僕は、扉に手をかけた。そして開ける。

ガチャリという音。あまりに無味乾燥なそれに、諦観のような思いを感じるも、それはすぐに思考を停止させ、前に見える……今にも崩れそうな彼女に向かって言う。

「僕は、また君と楽しく大富豪ができるような未来を望んでいる。四字熟語も、もっと覚えろよ。僕と話しが通じるくらいな。ちなみに相思相愛って、四字熟語じゃあないからな」

彼女は、そんな僕の言葉に、呆気にとられたようで反応できない。

「速く追いつけよ。《向こう》で待ってる」

ガチャリと、閉まる扉。訪れる沈黙。訪れる決別。

終わりの始まり。

彼女は、泣きはらした目を擦り、口元を緩めて……真上を向いた。

首が痛くなるくらいそって、天井を見るように、軽く微笑みさえして、そこには何か清々しささえ感じられる。

「……お嬢様」

「は。はは。もう、狡いなあ、あいつは。ホント、卑怯だよ。人の初恋、持っていつておいて……天童として生きる、理由が出来ちゃったじゃん」

「何か、言いましたか」

「ん？ いや別に。何も言っていないよ。サクラさん」

「……………そうですか」

うん。本当に、本当に……………狡いなあ。

## 19 / 灯台元暗

この世には、明かきれない闇がある。明かしてはならない闇がある。

世界に光が必要であるように、世界に闇は必要だ。

闇がなければ光は成らず、光がなければ闇は成らない。

灯台の元が暗いのは、灯台がその闇を引き受けてくれているからだと、私は思う。

海をどこまでも照らす、光の道しるべ。光を世に放ち、闇を飼い慣らす。

そんな存在が、《私達》だ。

この世に必要な悪を引き受ける。誰かがやらなければならぬことなのだ。

必要悪という、闇を。引き受ける役目。

それは、決して日の目を見ない所業だろう。人知れない所業だろう。ある日誰かが、「お、頑張ってるな」なんて誉めてくれなんかしない、けれどそれは……そんなことを求めてするようなことではないのかもしれない。

私達は、それでいい。

私は、闇というものを見誤っていた。分かったつもりになっていた。その本当の恐ろしさと、それから強さを。私は、誤解していた。知識だけを身に付けて、知ったつもりでいた。

実際に触れてみて思う。ああ、これが闇か。

暗く、深い。そして引き込まれそうになる。

そして美しい。それは本当に美しい。

私は心のどこかで、《彼等》を知ったつもりになっていたのだろう。一から百まで、徹頭徹尾、分かったつもりになっていたのだろう。

その恐怖を肌身で感じて初めて、《彼等》は完結するというのに。完成するというのに。

本当に、愚かしい。

結局、私は……知りたかっただけなのかもしれない。分からないものに、手を入れてみるような、子供のような気分で……間違いを犯したのかもしれない。

そうしたら、火傷した。余りに熱くて、手を引っ込めた。

馬鹿みたいだ。怪我しなきゃわからないのは、痛い目をみなければ気付けないなんてのは、私が未熟だったからだろう。

間違えたのなら、それを忘れて進むしかない、彼は言った。

こんな私に、言ってくれた。

それは本当にそうだと思う。彼の言うとおりだと思う。

取り返せない失敗は、次のステージで取り返すしかない。

挽回できないミスは、忘れて次に進むしかない。

後悔という行動に、少したりとも意味が皆無のように……。既に過ぎ去った過去を悔やむのは、本当に無意味だ。

けれど、だけど。

間違いから何かを学ぶことが、間違っているとは、私は思わない。

後悔するのではなく、反省することに、意味はある。

今回の件で、私は間違った。どうしようもなく間違った。取り返しようもなく、誤った。

だとしても、だ。私は後悔していない。間違ったとは思っていても、道を間違えたとは思っていない。

彼に出会えた。彼を知れた。彼と交えた。彼に、救われた。

私は本当は、誰かに救ってほしかったのかもしれない。無意識の内に、そう願っていたのかもしれない。

彼のような存在を、待っていたのかもしれない。

図々しい話だ。万に一つも救えない。余すことなく滑稽だ。浅ましく醜悪だ。

有りもしない救いの手を、存在しない助けを求めて……私の手は空を切るばかり。

虚しく空を切るばかり。

だったはずなのに、彼は現れた。有り得ないはずの、存在しないはずの救いだった。

彼をずっと、待っていた。

私は、彼を待っていた。

こつこつと、こつこつと。硬い地面に、ハイヒールが当たるような音。

断続的にそれは繰り返され、もう一つ……それにはもう一つの足音が追従している。

こちらは革靴のような無機質な音。それにはまるで、主の後ろに付き従うかのような、主従関係の窺える感覚での二人分の足音だった。

一人の後ろに、もう一人。譲るような間を空けて、もう一人。

「……ふう、自分の父親に会うだけで、どうしてこんなに気を使うんだろ」



「それも仕方のないことでしょう。旦那様は、天童の頂点でありますから。財閥の頂点でありますから」

「サクラさんまで、そんな定形句を言うの？ あの人だって、一応は人間なんだよ。人間で、人の子なんだから。そして人の親なんだから」

「……お嬢様は、考え過ぎなのは」

かつかつと、音は続く。続く続ける。二人分の音。

「考え過ぎにもなるよ。考えも無しに付き合えないってば。あの人には、頭の中で思考を絶やすべきではないって、いつも言うでしょ。聞き飽きたけどさ。考えない人間は信用できないって思ってるみたいだから」

こっちの思考なんて、お見通しだよ多分。

彼女は、全て分かっているというふうな……その人間について知らないことは、知っていることを下回るなんていうような風に、言った。

「……自分にも他人にも、厳しい方ですから」

「厳しいというより、あれはストイックっていうか……殆ど病気に近いよ。まあそれ程に外れていなければ、狂っていなければ……務まるような立場ではないけれど」

常人には、とても耐えられない。常人には、とても務まらない。

そして私も、人のことを言えるような身ではないのだ。

「ねえサクラさん。私ってやっぱり、普通じゃないかな」

そんな、否定が前提の……質問。

「……普通がいいのですか。お嬢様は、普通をお望みなのですか？」

「……………」

エプロンドレスを身にまとう、彼女の大切な存在は言う。

「普通という二文字は、言うほどに楽ではありませんよ。言うほどに楽しいだけではありませんよ。お嬢様は、そう悲観することはな  
いと思います。それに……………」

これは言いたくなかったというような、あまり乗り気ではない表情  
を浮かべながら。

「お嬢様が普通のどこにでもいる一人の少女だったのなら、《彼》  
には出逢えなかったでしょう？」

「……………うん、そうだね。そう、だね」

胸に手を当て、目をつぶる彼女。今はいない誰かを、思い出す彼女。  
大切にしまつてある大切な人の記憶を、出して眺めるような。

普通ではないかもしれないが、彼女は女性として……女性らしい女  
性である。

大切な感情を、宝石のように大事にする。

世界中に今を生きる彼女達と、何一つ変わらない。

普通であるかないかなど、今はもう気にしない。気にならない。

もういいのだ。そんな小さなことは、些細なことはもう忘れた。

私は《天童》で、《天童アカリ》だ。

私はここにいる。

彼も、どこかにいる。

きっと、また人知れず何かと戦っているのだろう。この世の釣り合いをとる為に。

見えない敵と、相対しているのだろう。

……また別の女の子に変なことされてないといいけど。

私のこと、忘れないでよね。

絶対追いついてやるから。

一つの大層な、両開きの扉の前についた。開けることも躊躇われるそれに、彼女は視線を向ける。

「……あゝあ。やっぱりやめようかな。怒られるとか、説教される

とかつていう、次元の話じゃないよ。勘当されるか、謹慎処分か…  
…まあそれも楽でいいかもしれないけど」

「覚悟はあるのでしょうか。どんな罰を受けようとも」

「まあ、ね。前に進まなきゃ、だからね」

彼女は諦めたように、それとも決断したかのように……その手を両  
扉にかけた。

私はこれから、この中にいる魔王と闘わなければならない。そして  
勝たなければならない。

それは世界と戦う次に大変なことだけれど、私はもう決めたのだ。

前に進むと。彼の待つところへ、追いつくのだと。

その為ならば、どんな苦勞も厭わない。

強く扉を開いた。ガチャリという無味乾燥な音。私はその中へと、  
最初の一步を踏み出す。

…… e n d

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2781j/>

---

灯台モト暗シ

2010年10月14日21時32分発行